

機々關及び有機作用だけに就て見れば生存に有利なものは發達して然らざるものは滅亡するといふ自然淘汰の原則に由て説明され得る様であるが、併し精神作用の場合には規範性と生存力とは正比例をなして居ない。

斯の如く規範の意識は必ずしも其所有者の生活力や自己保存の能力を増進しないにも拘らず、存続し、且つ大體に於て漸次増進し、發達し、深遠となり、精微となり行くとすれば、其れは直接な、即ち他の作用から獨立な、其自身に具有する、規範意識其者に附着する力に基くとせざるを得ない。良心(廣義)其者が其自身價值である、一種の力である、と見ざるを得ない。規範意識は生存といふ様な他のものゝ方便として存立發達して居るのではなく、其自身意義を有し、其自身の力で自己を維持し實現するものである。若し一旦それが吾々の精神に意識さるゝならば、其れが生活といふやうな他の目的に適合するや否やに拘らず、自己を主張し全精神生活を支配せんと努力する者である。併し、此點を更に明かにせんが爲めには吾々は規範をば、今

迄は唯評價の原理としてのみ見たに對して更に他の面から見ねばならぬ。

(六) 規範は前に述べた様に評價の原理である、即ち自然必然的に起つた精神活動をしかあるべし、あるべからずとして是認若くは非認するところの標準である。併し評價には對他評價と對自評價とがある。吾々は他から要求することをば自身からも亦た要求する。自然的に起つた自己の表象活動を論理的規範に照して検査する。必然的に起つた自己の意志活動を良心の審判にかける。自己の創作、自己の趣味を美的規範に訴へて評價する。而して此對自評價といふことからして規範の最高の意義、即ち其れが單に評價原理たるに止まらずして決定原理であるといふことが成り立つ。併し此點に關しても亦た、美、認識、意志の三つの場合によつて同様でない。第一に、美の場合では、規範の意識は直接には美的享樂をも、美的創作をも左右するとは出来ぬ。双方共に規範の意識的適用を待たずして自ら規範に合致しなければならぬ。第一に享樂に就て言へば、享樂の瞬間に於て感情



をば意識的に美的法則に訴へて規正するといふことは不可能である。無論吾々は屢自然の美に接し名家の作品を觀賞することによつて美的感情を養成し規範的に感ずるといふ習慣を造出すことは出来る。併し享樂の瞬間に於て、美的規範の意識的反省によつて有意的に感情を左右するといふことは不可能である。若しさういふ事が出来たとすれば其れは已に美的享樂ではないのである。創作の場合も亦同様である。尤も、凡庸の作家は製作に際して意識的に美的法則に準據せんとすることはあらう。併し其れは確かに藝術的才能の缺乏を示すものである。大藝術家は豫め法則を意識しない。無意の間に製作して而かも自ら規範に合致する、其規範は完成された製作を通じて初めて藝術家自身にも他の享樂者にも意識される。美的機能の特徴は此點に存する。而して此特徴ある爲めに美の場合には規範は直接には評價原理以上に出ることは出来ない。

然るに認識及び意志の場合には、感情の場合に不可能であつたことが、單

に可能であるのみならず寧ろせねばならぬと要求せらるゝが常である。表象作用も意志作用も規範の意識に由て有意的に規正されねばならぬとせられて居る。論理上及倫理上の良心は意識的に表象及意志を左右する力を有する、即ち評價原理である外に決定原理である。吾々は一旦論理的規範を意識すれば有意的に之に準據して思考し得るのみならず、しかせねばならぬといふ義務を感ずる。科學的思考即ち方法的認識なるものは畢竟規範の意識によりて有意的に營まるゝ表象作用に外ならない。意志に於ては此事は尙ほ著しくなる。吾々は規範の意識なくとも道德的に意志、行動するとは出来る。併し規範の意識を伴ひ而してそれが執意を決定する最強の動機である時に道德的意志及び道德的行動は最も確實である。(此點よりしてカントの嚴肅主義は其儘採用するとは出来ぬが一面の眞理を有する。)即ち此場合に於ても規範は評價の原理たるに止まらずして直接意志生活を決定する力となつて居る。



要するに美的規範は唯間接に、論理的及び倫理的の規範は直接に、精神活動の決定根據となることが出来る。單に出来るのみならず、其れが一旦意識せらるれば程度の強弱はあるが必ず之に従はざる可かずといふ一種の心理的拘束が伴ふ。一度論理的法則を意識すれば之を無視してはならぬといふ願望が伴ふ。一度倫理的規則を意識すれば之を意志の動機とせねばならぬと感ずる。斯くて眞善美の規範又は理想の意識は初は自然の中に、自然の一形式として起るのであるが、一旦それが起つた後は自己に具有する力によつて次第に自然を規正し支配して行く。

(七) 上に述べて来たことを承けて吾々は人格とは何ぞやといふ問題に對して答へることが出来る。人格の核心をなすものは眞善美の三面に亘つた規範意識、即ち廣義の良心である。此良心は生活の方便としてなく、其自身權威と目的と價值とを有し、其自身に具有する力によつて自己を實現し行くものである。吾々は自己の思考、意志、感情が此規範に契ふや否やと

規範

いふことに對して責任の感念を有する。斯の如く眞善美の規範を意識してそれが現實にさるゝや否やに對して責任を感じ、之によつて直接間接に之を自己の精神活動の決定原理となし得るところのものが人格である。

規範の意識を缺き、若しくは之を意識しても何等の心理的拘束、何等の義務の感念を伴はぬものは人格ではない。カントの場合に於ても人格の核心をなすものは其自身絶対の權威と目的と價值とを有するところの良心であつた。今は唯その良心の範圍が擴大されたのみである。カントの場合に人格の核心をなしたものは道徳上に於ける個人内の超個人我であつた。今は眞善美三面に亘つた個人内の超個人我である。

吾々が斯の如き自己の本性を意識すること、即ち此人格の威嚴、即ち自己の内に於ける良心の權威を認むることが眞の「我」の自覺である。其故に眞の自覺には如何なる外的威力の爲めにも、如何なる外的拘束の爲めにも此權威を曲げてはならぬといふ意識が伴ふて居らねばならぬと共に、又た自



然我即ち個人的の利害、好惡、愛憎等の爲めにも之を傷けてはならないといふことが含まれて居る。眞の自覺は普遍妥當的な規範意識に根柢を有せねばならぬから、狭い自然我の主張でなくして超個人我によつての其れの征服規正でなければならぬ。

### 一三 要約——理性、我の自律

「我」の自覺史は、若し自覺といふ語を廣義に解するならば、個人精神が思想及び實行の兩面に亘つて集合精神の桎梏を脱し、或は寧ろ其の搖籃を離れて、宇宙及び人生に對して己れの眼を開き始めた時に端を開くべきであらう。之を西洋の思想史に就て言へば、傳承的の世界觀及び人生觀に對して起つた個人的思索の結果として吾々の知れる最初のものたるミレトス派の哲學、或は更に溯つて傳説又は神話の客觀的描寫を主としたホメーロ

ス等の抒情詩時代よりして人生に關する個人の主觀的感想を歌つた抒情詩若くは個人の倫理的考察の結果たる箴言詩への過渡に筆を起すが至當であると言ふことが出来る。併し是等の場合に於ては未だ個人の自己に對する眞面目なる省察がない。集合精神の懷ろにはぐゝまれて居た個人精神が醒ざめ始めたといふ意味に於ける「我」の解放はあるが、未だ嚴密なる意味に於ける「我」の自覺はない。嚴密なる意味の自覺は、汝自身を知れを標語としたソークラテースに端を開いたといはねばならぬ。ソークラテースは單に從來専ら外的宇宙に向けられた哲學的考察を、我に轉せしめて、之を哲學的考察の唯一の對象としたのみならず、此「我」の省察をば眞面目に生涯の事業となし、且つ之によつて發見したる眞我に至上の權威を認めて、實行上此信念と終始したといふ點に於て、最純粹なる意味に於ける自覺者である。其思想の内容に就て言へば尙ほ極めて幼稚で、不明確で、不徹底で且つ偏局的であるが、併し其の大體の方向に就て言へば近世思想に對して動



かすべからざる範を示して居る。

「ソフィスト」は「人は一切の事物の尺度」と説いた。彼等も亦廣き意味に於て一種の自覚者といはれ得るであらう。併し其自覚は唯あらゆる客觀的なものから解放された、或は寧ろ解放されたと思惟したといふ唯の消極的意味の自覚であつて、眞面目なる「我」の洞察に根柢を有する眞の自覚ではない。彼等の所謂「人」は唯の自然的産物としての個人であつて、彼等は此自然的個人の外に人を認めて居らぬ。此點に於ては彼等はタレーヌ以下の自然哲學に反對しては居るものゝ、全然自然哲學的の考へ方に支配されて居る。現に彼等の學理上並に實踐上の虚無説は「エレヤ」若くは「ヘーラクライトス」の自然論的人性觀を前提としたものである。彼等の史的旨趣は、若し人を唯の自然的産物として見るならば、自然的に起るところの吾々の表象結合や動機作用は其刹那に於ては悉く眞又は善であるといふ意味に於て「人は一切の事物の尺度」である、或は眞又は善といふ概念には普遍必然といふこ

とを含むから眞に眞又は善と呼ぶべきものはない、といふことを示すことに依て自然哲學の總決算をなしたといふ點にある。然るにソークラテースは此自然的個人の奥底に、普遍的な、超個人的な理想人を發見した。ソークラテースが對話によつて對話者の精神より引出さんと力めたものは、普遍的に妥當なるべき、自然的の表象結合や動機作用の價值決定の標準たるべき規範である。斯の如き規範の存在は、苟くも何事かに就て論議又は主張せんとする者である以上は——従つて「ソフィスト」と雖も——必ず豫想し承認せねばならぬところのものであるが、「ソフィスト」の學理上並に實踐上の虚無説は全然之を非認して居る。ソークラテースは此矛盾を指摘して、「ソフィスト」が認めた、個人の性癖や性向や境遇やに依つて決定さるゝ自然的必然の外に更に理想的の必然を認めた。言ひかゆれば、自然必然的の作用の眞理價值の判定の恒常の標準となるべき理想的立法を認めた。ソークラテースの第一の效績は此理想的立法、或は更に簡單に、「理性」の發見者であ



るといふ點にある。

「個人精神は抒情詩人や箴言詩人やタレーヌ以下の自然哲學者に於て集合精神より解放されたけれども自己の内に理性を發見することが出来なかつた爲めに遂に「ソフィスト」に至つて一切の客觀的權威を排する個人的氣隨の無政府主義を唱道するに至つたが、ソークラテースは之に對して初めて理性を發見し、外面よりして個人を拘束するところの傳承的權威の代りに内面よりして個人の氣隨を規正するところの超個人的理性の權威を確立擁護することを以て其生涯の天職とした。彼に取ても、人は一切の事物の尺度である。併し彼れの所謂「人は自然的心理學的個人でなくして、規範的な自律的な超個人的理性である。」

「自律」といふことは理性の本質である。理性は其自身眞善の規範の生源である、其自身最高の立法者である、其れを優越した他の立法者あることを許さぬ。ソークラテースは傳習を尊重し國法に忠實であつた。併し是等

は唯吾々の理性の認容を得るが故に尊重すべきであるとするが彼れの思想の基調である。而して之と關聯して、理性は他のものゝ方便に非ずして其自身目的である、而かも最高の目的である。理性は單に眞偽善惡の審判者たるのみならず、吾々の全生活に對して至上の權威を有する、吾々の生活の一切は之が爲めにあるべきであつて、吾々の生活の如何なるものも之を方便とすべきでない。斯くて彼は永遠なる生命を有すべき理性の擁護の爲めに、感性的な時間的な自らの個我を犠牲として顧みなかつたのである。ソークラテースに偉大なる第二の點はその發見した理性に對する強烈なる信仰、實行上に於ける理性の至高權威の實證である。

「ソークラテースの理性の發見と、彼れの殉道の死に於て最高調に達した此理性に對する眞摯なる信仰とは、第一にプラトーンによつて發展されて、主として倫理上の規範のみが含まれて居た理性は眞善美の三者を包容するに至り、而して眞知は眞在の模寫でなければならぬといふ獨斷的豫想よ



り出發した辨證と靈活なる詩的空想と宗教的要求とによつて實體化されて、眞在と理想との兩性質を具有する「イデア」界の概念と化し、之に依てソークラテースの認識論は形而上學的基礎の上に立つに至り、理性の認識論は「理性の形而上學」となつた。斯くて希臘哲學の黄金時代とも稱すべきプラトーン、アリストテレスの形而上學體系の時期を喚起したのであるが、併し理性が斯の如く形而上學化されて宇宙的性質を帯び來るに連れて、其れは主として宇宙説明の原理と化して人的理性の自律性又は立法力といふことはおのづから次第に輕視さるゝに至つた。即ちソークラテースに於て萌芽をきざし始めた理性の自律の觀念は純粹なる形を以て發展する機會なく、例へばアリストテレスの「能動理性」「ストア」派の「ヌース」といふが如き半宇宙的半人間的の性質を帯びた理性の概念中に半自然的半規範的の性質を保存するにすぎぬやうになつて（即ち理性は吾々の内に於ける立法者であるが、而かも吾々は其れを普遍的な宇宙原理より受け得るのである

と考へらるゝに至つて）古代哲學は終つた。

ヘーゲル以來哲學史家の常套語となつて居るやうに、近世思想の發展と希臘思想の發展との間には顯著なる並行がある。「ルネッサンス」前後の新世界觀、新人生觀、新政治觀、及び自然科學上の諸發見等は客觀的教權に對する個人理性の廣義の自覺の結果である。併し是等の現象に於ては尙ほ眞面目なる「我」の省察を缺いで居る。第十七、十八世紀に於て大陸を本據として榮つた純理派の諸形而上學體系も亦た此點に於ては同様である。近世に於て初めて「我」の省察をば哲學の中心問題としたのは經驗派のロックである。此點に於てロックは古代に於けるソークラテースに相應する位置を近世史に於て占むべき思想家であるといへるのであるが、併し彼れが對象とした「我」は「ソフィスト」の場合と等しく自然的な心理學的人であつた。其發展の結果も亦た「ソフィスト」の學理上並に實踐上の虛無說に比しては遙かに深遠で幽玄で且つ穩健なものはあるが併し或程度までは之と共通の性質を有



するヒュームの懷疑説、或は更に精密に言へば形而上學に對しては絶対否定、自然科學に關しては徹底した蓋然論實踐上に於ては自然主義となつた。然るにカントの批判哲學は宇宙や自然的產物としての人をば哲學の當面の對象とせずして、人間の立法的機能の考察、即ち彼れの所謂「理性の批判」を哲學の中心問題とし、理性の自律といふことをばその哲學の中心概念とした。カントに取ても亦た「人は一切の事物の尺度」である。併し其所謂人はソークラテースの場合に於てと同様心理學的の自然人でなくして規範的理想人である。此點よりして近世に於ける嚴密なる意味の「我」の自覚はカントに始まるといへる。

カントの理性の批判は知らるゝ如く知情意の三面に亘つて居るが、理性の自律が最明確に高調されて居るのはその倫理説である。カントによれば「意志の自律は凡ての道德法及び之に合致したる義務の唯一の原理である」。(Die Autonomie des Willens ist das alleinige Prinzip aller moralischen Gesetze und

der diesen gemässen Pflichten.) カントの倫理説の此中心觀念に對しては有名なニーチエの攻撃がある。カントは直言命令を以て倫理の根本原理とする。併し命令 Imperativ は命令者 Imperator を豫想するではないか。従つてカントの倫理説が自律をば道德の原理とするは矛盾である。道德はカントの言ふ如く其本性上命令であるが、併し其必然の結果として他律的でなければならぬ、道德と自律とは絶對的に相排擠する。これがニーチエのカント説に對する批評であつて、彼は之によつてカント説を論破したと思惟し、而して前世紀末期以來の多くの自然主義者は之に雷同した。併し此點に關するニーチエのカントの理解は極めて淺薄である。彼はショーペンハウエルの手引を通してカントの道德哲學を見たがために全カント哲學の核心となつて居るその最深邃なる洞見を逸して居る。道德の世界の命令者は吾々自身の奥底に存する立法者其者であると思ふところにカントの創見がある。「爾は爾自らに爾の善惡を興へ、又た爾の意志を律法の如く爾自らの上



に掲げ得るか、爾は爾自身に對する法官たり、爾が律法の復讐者たり得るか」といふツラトウストラの問に對してはカントは此問に先んじて已に明かに答へて居る。曰く、人は、人間は其義務に依て律法に拘束さるゝといふことを見た、併し彼は彼自身の、併ながら普遍的なる律法に服従するものなることに考へ及ばなかつた。——己れ自ら與へる以外の何等の律法にも服従せぬといふことが理性的生類の品位の根柢である」と。意志の自律、吾々の内部に於ける實踐理性の自己立法、これが即ち眞誠の意味に於ける自由である。眞の意味に於ける律法と自由とは單に相排擠せざるのみならず、互に相要求する。一なくしては他は完全に實現することは出来ぬ、否、其本性上互に相合致する。無法、無拘束は却て不自由であり、內的の奴隸状態である。自律の意志、自由意志、道德法に順依したる意志、此三者は畢竟同一物である。

併し自律は單に道德的生活の本質にして根本性質たるのみならず、又た

科學の本質である。科學が自律的であるといふは、單にそれが自己の領域に於て絶對の權威を有する、若し此領域内に於て自己以外に何等かの權威を認むるならばそれは眞誠の科學でなくなる、といふ丈の意味ではない。此の如き意味に於て科學が自律的であるべきは無論であるが、併し科學は更に內的な本質的な自律を有する。即ち科學的研究者は其科學の方法概念を創造し、自己の特異な個人に特異なものではなくして科學的思惟に特異な先天的豫想に従つて其材料を整理する。彼は事實の受納者又は模寫者に非ずして事實に對しての法官である。知識は究極事實に對する思惟の順應でなくして思惟に對する事實の順應である。科學は事實に對する悟性の立法である。

カントの理性の自律の觀念は理性生活の他の圏域に關しては、第一に其實踐哲學、次に其認識哲學に於けるほど明確に且つ徹底して現はれて居らぬ。併し若しカント哲學よりして彼が當時の啓蒙思潮、成立宗教、其他の思



想的還象より受けた、此根本觀念と調和し難き影響を淘汰して、此根本觀念を徹底せしめるならば、それは又た藝術、宗教等の他の理性生活の圏域にも適用されねばならぬ。而してこれは又たカントを祖述する多くの理想主義者の取つた發展の途である。

藝術も亦た自律的である。第一に藝術は其れの立法者が藝術家自身であるといふ意味に於て自律的である。藝術家の目的は外的自然の模倣でなくして此外的自然を機會として自己の内面を表現するにある、自然の奴隸となるに非ずして自己の規範に基いての自然の征服又は改造である。併し其規範は實行及認識等に關するものとは全く別種に屬するから、藝術は其自身の領域に於ては他の何者にも隸屬せぬ。無論藝術も理性生活の他の形式、道德、科學、宗教等と絶えず相接觸交渉する、又た是等よりしてその材を借り來ることはある。併し藝術としては決して他の圏域に干渉せざる代りに又た他の圏域の干渉をも受けぬ。他のものゝ前階でもなければ

方便でもない。無論吾々の唯の娛樂の爲にも存せず、快不快の彼岸に立つ。快樂主義はカントによつて倫理學よりして最終的に排擠されしと同様に美學よりも排擠されねばならぬ。

宗教も亦た自律的である。第一に、宗教も亦た其自身に固有なる豫想に基いての特異なる世界の見方に根柢を有して居るから、理性生活の他の領域に隸屬せぬ、其等の方便でもなければ前階でもない。宗教をば道德の方便と見るも、哲學の前階と見るも、或は哲學によつて建設さるゝと見るも、宗教の基礎を吟味せざるに基く謬見である。第二に宗教的信仰も亦た客觀的權威の強制を排する。強制されたる信仰は眞の信仰でない。眞純の宗教に於ては宗教の主觀と客體との交渉は直接であつてその間に仲介者あるを要せぬ。此の如き宗教的體驗の自律が最純粹な形を以て現はるゝは宗教の開祖又は改革者と呼ぶるゝ宗教的天才であるが、併しそれは又た一般に宗教的體驗の純不純を驗すべき價値の標準である。



要するに理性生活は人文活動の種々の形を取て現はるゝが、何れも自律的生活である。第一にそれは自然事實、現實といふが如き漠然たる名をもつて呼ばるゝものでカントの意味するやうな悟性の立法的機能を待つて成立つた自然でないに支配されずして之を支配するといふ意味に於て自律的である。道德も、科學も、藝術も、宗教も自然に對する理性の先天的な立法作用に依つて成立つ。而して是等の人文活動の種々の形式には各自特異なる先天的基礎がある。従つて其各自は銘々獨立の別天地を形造つて居つて、一が他の附屬物でもなく、方便でもなく、前階でもない。斯る意味に於いて又た各々の理性生活の形式は自律的である。雙方を含めて、自ら法を立て自ら之に服従するといふ意味の自由が理性生活の根本特徴である。而してそれが眞誠の意味に於ける自由であつて、此意味に於て理性生活、即ち種々の形の人文活動は眞誠の自由の實現である。これが、古代に於てはソークラテースに端を開き今世に入つてカントに依て精鍊された理性の

自律の觀念が更に一般化せられ且つそれよりして不純の要素の淘汰された結果である。

„Der Mensch, wo er bedeutend auftritt, verhält sich  
gesetzgebend.“ — Goethe.

*Handwritten text in German, likely a quote or note related to the main text.*



## 二 自然必然的、精神必然的、 及び目的觀批判的

### 一

近世歐洲哲學思想の變遷を見るに、其考へ方に大體三様の種別があると思ふ。之を私は自然必然的、精神必然的、目的觀批判的と呼んで置く。而して此三様の考へ方は又た極々大體ではあるが時期に配布され得ると思ふ。もつとも、哲學の考へ方なり又は其の内容なりを時期に配布するといふことは種々の誤解を惹起す恐がある。即ち、各時期には常に其きまつた型に充分よく當てはまらない思想がある。又た一の哲學體系に就て見ても、一

自然必然的、精神必然的、及び目的觀批判的



の思想が主位を占めて居ると共に他の思想が其れに混淆して居る。併し大體上、近世哲學の一定時期に於ては今述べた三つの考へ方の中の一つが根本的傾向を形造つて居る。而してその各時期の一方の哲學體系を取つて見れば、其根本傾向と相並んで、或時は之と調和が困難である仕方、他の考へ方が並び存して居る、又た或時は其考へ方では其本性上解くことの出來ぬ課題が課題とされ解決が試みられて居る。其結果として思想の乖離や不徹底が起る。此乖離や不徹底やが漸次發見されて、考へ方に對する反省が起り、其結果、初の間は明確に區別されて居ない是等の考へ方が次第に明確に離して考へられるやうになる、といふことが近世哲學思想發展の重要な一面をなして居ると思ふ。以下は此一面に關する特別の研究といふ性質の者ではなく、唯普通の哲學史上の知識より此一面に關する部分だけを抜き離して見た結果である。目的觀批判的の考へ方が他の考へ方に對する關係に就ては横には今までも多少論せられたことであるが、今は同

一のことを縦に歴史的に見てみやうとするのである。尙ほ考へ方といふ語の代りに方法といふ語を用ゐてもよい場合が多いのであるが、或場合には其れでは餘り限定され過ぎるといふ嫌があるから、考へ方といふ廣漠なる語を用ゐることにする。

## 二

先づ此三つの考へ方の性質と分期とを概略述べて置く必要がある。第一は自然科學の考へ方を哲學上凡ての對象、凡ての問題に適用するものであつて、一切のものを因果必然的、或は自然必然的、或は機械的必然的に見る。因果必然觀は自然科學の考へ方の結果でなくして其根本豫想であつて、其れのみが哲學上、世界觀又は人生觀の考察に適用さるゝ結果は必然的に決定論的、沒價值的(wertfrei)の世界觀又は人生觀に了る。或は、歷史上現實に現はれた思想に就て見れば、此考へ方を採用したものでも徹底した決定論や



沒價值觀でないものもあるが、併し此見方を徹底せしむれば斯の如き世界觀や人世觀に歸着せざるを得ないと言へる。此考へ方が主位を占めて居つた時期は主として第十七世紀及び十八世紀であつて、第十九世紀の中葉以後に於ても其れは有力なる傾向として存して居る。

第二の考へ方は、第一が凡てのものを目的又は價值といふことを離れて純機械的に見ると正反對に、凡てのものが價値の實現を以て目的とするところの宇宙根柢、即ちどういふかの形の(即ち意識的若くは無意識的、人格的若くは非人格的といふやうに色々見方の相違はあるが)宇宙理性又は宇宙精神の發現又は發展段階等と見るものである。従つて、此見方よりすれば凡てのものが宇宙根柢としての或形の理性又は精神の目的に對して必然的であると見られるのであるから、之を自然必然的に對して精神必然的と名けておく。或は、理性必然的 (vernunftwendig)、目的觀必然的 (teleologisch-*teleologisch*wendig)、理想必然的 (idealtwendig) といふ様な語でも或程度までは同様の意

味を表はし得るのであるが、併し是等の語は外の意味で已に慣用されて居る。例へばカントはその第三批判書に於て目的觀をば學 (Wissenschaft) ではないが理性必然的の見方 (vernunftwendige Betrachtungsweise) であると説いて居る。又た、目的觀必然的、理想必然的等の語は共に今日の西南獨逸派などで自然必然的に對して用ゐられて居る語であるが、併し此場合では前に述べたやうな宇宙根柢に關する形而上學的觀念は毫も伴ふて居らぬ。今、精神必然的といふ語は、未だ斯の如く他の意味で慣用されて居らぬし、且つ此考へ方の最よき代表者と見らるべきフイヒテ、ヘーゲル等の哲學をば、カントの純論理的な超驗的統覺を形而上的實在化して客觀的又は絶對的「精神」としたといふ點よりして之を「精神の形而上學」Metaphysik des Geistes と呼ぶ者もあるから、「精神」といふ語をば何等かの價値又は理想の實現を目的とするところの形而上學的原理といふ意味に解して、精神必然的の語をば上述の様な意味で用ゐるとは必ずしも不都合でないと思ふ。他の二語は此處と



同様の意味で已に用ゐられて居るが此語は新造語であるから特にこれ丈けの事を附加へて置く。詰り、目的論的形而上學の立場に立つて一切の事物をば宇宙目的に對して必然的の意義を有すると見る考へ方を意味する。尙ほ此考へ方は理想又は理性價値の總體又は統一的關係の形而上學化といふことが其根柢となつて居るのであつて、而して理想又は理性價値の形而上學化は藝術的及實踐的(倫理宗教的)要求に根柢を有する(此ことは後に説く)ものであるから、第一の考へ方が自然科学的と呼ばれ得るに對して此考へ方は藝術的實踐的と呼ばれ得ると思ふ。此考へ方よりすれば、一切の事物が理想の發現、又は發展段階であり、之に對して必然の意義を有するから、第一の考へ方が沒價値的の世界觀、人生觀に了らねばならぬに對して、これは汎價値觀に了らねばならぬ。此考へ方は第十九世紀初期の哲學、或は廣義に於ける「ロマンティック」の哲學の主潮を形造つて居る。

此二つの考へ方は、一は徹底すれば純機械觀的、純沒價値的の世界觀、人生觀に了らねばならぬし、他は目的觀的、汎價値的の世界觀、人生觀とならねばならぬといふ點に於て對角線的に反對の方向を代表して居るが、併し又た重要な點に於て共通の性質を有して居る。第一に、兩者は共に形而上學的である。自然必然的なり精神必然的なりを吾々の物の見方とせずして、物其者の存在の仕方とする。第二に、兩者は共に價値の平等觀又は少くとも相對觀である、或は徹底すればそれに歸着せざるを得ない。第一の考へ方は一切の事物を唯機械的必然と見て價値上の區別を見ない、或は見ることは出来ない。第二は一切を理想の發現若くばその必然の段階と見るから又た價値の差別少くとも價値の絶對の差別を立てることは出来ない。發展段階の高下を認めるにはあるが、併し一切の萬有は其段階、其位置に於て悉く正しい、悉く相對的の價値を有する。第一の考へ方を最徹底して遂行した哲學はスピノーザの數學的決定論であり、第二の考へ方の最顯著なる代表者はヘーゲルの汎理論である。其他「ロマンティック」期に於ける理想



主義的汎神論、殊に藝術的或は宗教的傾向に富んだノヴリス、シュライエルマッヘル、及び後期のフイヒテ(殊に *Anweisung zum seligen Leben* に現はれたる)の哲學は此第二の考へ方の代表者中に數ふべきである。

斯の如く形而上學的であり、又た價值の平等觀若くは相對觀を以て了るべき第一及び第二の考へ方に對して、認識論的で、且つ價值の反對及び絶對性を以て出發し終始するところの第三の考へ方がある。此考へ方は、其位置の如何、その生成の仕方の如何に拘はらない絶對價值があるといふ根本豫想を以て出發する。第一の考へ方よりすれば、凡てのものは唯機械的必然的であつて眞でもなく偽でもなく、善でもなく惡でもない。即ちスピノーザが考へたやうに、ネローの罪惡と雖も善でもなければ惡でもない、唯必然であるとなるのである。第二の考へ方よりすれば凡てのものが其位置に於ては悉く價值を有する、全體の課題(*Aufgabe*)の充足に對して悉く意味を有する。然るに第三の見方よりすれば、必然的と見らるべきもの、中に其

生起を促した機械的誘因の如何に拘はらず、其位置の如何に拘らず、絶對に善なるもの、絶對に眞なるものがある。此絶對價值をば或特有の方法即ち目的觀批判的方法を以て研究することが此考へ方を採用する哲學者の課題である。此第三の考へ方は第十八世紀の末期に於てカントの批判論によつて端が開かれ、更にフイヒテによつて發展され、所謂目的觀的なる性質が明かに之に結付けらるゝに至つたが、併しフイヒテ自身の思想中に已に第二の考へ方に轉ずる端が開かれ、更に他の「ロマンテック」の哲學者の多數に依つて次第に其特色が滅却されて第二の考へ方が専ら優勢となつたが、第十九世紀より現世紀初に亘つて又た復興されて來た。カントの批判論は主として第十七、十八世紀を支配して居つた第一の自然科学的の考へ方に反對して起つて居るが、前世紀より現世紀に亘つて復興した目的觀的批判論は之と併せてカント以後に出でた第二の考へ方をも併せて重要なる對抗物として居る。



以上三種の考へ方の意味と時代上の分布とを概説したから、次にその史的變遷を見たい。但し此處に斷つて置くべきことは、此三つより外の考へ方が考へ得られぬといふのではない、又た事實上此三つの外に考へ方が存せぬといふのでもない。現に「ロマンテック」の哲學中には、理性を形而上學化する、反對に盲動意志を形而上學化した「ショーペンハウエル」の哲學があり、又た宇宙根柢の内に理性的及び非理性的の兩反對因素を認めた「シェリング」の哲學の如き等がある。私は唯、比較的永い時期に亘つて主潮を形造つたのみならず、若し其れよりして形而上學的の様相を取除いてそれを唯の物の考へ方として見るならば、第三には已に斯る制限が加はつて居るから、これは特に第一、第二のみに就ていふ、永恒の價値を有ち得ると思惟するものゝみを擧げたのである。

## 三

カント以前の近世哲學は知らるゝ如く大體英國を本據とした經驗論と主として大陸に榮へた純理論との二派に分れて居るのであるが、併し此双方は共に自然科学の方法を哲學問題に適用し若くは適用せんとしたといふ點に於ては一致して居る。カント前の近世哲學は、純理論も經驗論も、ルネッサンス期前後に勃興した自然科学の方法上の自覺に端を開いたといふことが出来る。

個人理性の自律に基いて居る近世哲學が如何にして中世の教權中心思想から解放されて生出でたかと言へば、吾々は二つの事項を其重要な原因として數へなければならぬ。其第一は、科學的良心の解放と、其結果たる天文、地理、物理等の上に於ける諸發見である。第二は、宗教的良心の解放と、其結果たる、獨逸を中心として起つた神祕説及び宗教改革である。併し此二の原因中で、後者即ち宗教的良心の解放及び其結果たる神祕説及び宗教改革の精神は近世哲學の祖と稱せらるゝ、ベーコン及びデカートの思想



には重要な直接の關係は有つて居ない。無論、宗教改革や神祕説が舊教の教權から個人精神を解放した、それが爲めにペーコンやデカートの新思想の起り得べき餘地が造り與へられたといふことは認めねばならぬが、併し宗教改革や神祕説の精神が直接に積極的に此兩家の思想に影響を及ぼしたといふことは殆ど認められない。單に宗教改革や神祕説の影響が無いのみならず、一般に宗教的關心を缺いて居るといふことが此兩家の思想の重要な特徴の一となつて居る。ペーコンの思想が宗教的傾向や宗教的動機を缺くといふことは普ねく認めらるゝ事實である。デカートは神の存在の證明に腐心した。併し其れは決して中世に於ける聖アンゼルス等の場合の如く宗教的關心から出たのではなくして、此證明が確實なる認識に到達せんが爲めの必然の階梯であると彼が思惟したからである。ギンデルバントも言つて居る様に、若し「我」の存在以外の確實なる認識に到達し得べき途でさへあつたならば其れが神の概念を介しやうと何か他の概念を介

しやうとデカートは問はないのである。例へば、若し物質といふ概念が神の概念同様に此目的を達する爲めの階梯となり得ると思惟したならばデカートは神の概念を棄て、此概念を選ぶことを避けなかつたであらう。デカートに取ては確實なる認識が一切であつた。寧ろ確實なる認識即ちデカートの宗教であつた。

斯くてペーコンの思想もデカートの思想も、經驗論、純理論といふ正反對の方向を取ては居るが、大體上自然科学的精神の産物であると言へる。「ルネッサンス」前後の新興の自然科学の成效、即ち中世思想に大革命を持來したコペルニクス、ガリレイ、ケプレル等以下の諸発見の重なる原因として擧ぐべきものに二つある。第一は直接の感性經驗に訴へたこと、第二は綿密なる數學的計算に由りしことである。併し當時の自然科学者自身には彼等自らが採用しつゝある方法に就ての明かな自覺はなかつた。自ら如何なる方法を採用したが爲めに斯の如く大なる成效を仕遂げ得たかといふこと



に對する反省はなかつた。此近世自然科学の成效の秘訣を尋ね、其方法を明確に自覺し、此方法をばあらゆる學問に適用せんとして出でたものがベーコン及びデカルトであつて、其中ベーコンは感性的經驗をば真正の認識の唯一の生源と見、經驗的方法を精練して歸納的論理學及び經驗哲學の祖となり、デカルトは學問研究の範を數學に取り、一切の對象をば數學的演繹に倣つて研究せんとし、近世純理哲學の祖となつた。

此の如くベーコン及びデカルトの哲學は主として近世自然科学の方法的自覺の上に出つたのであるが、此形式上の特徴は近世哲學が其内容に於て宗教改革や神祕説の精神の積極的且つ直接の影響を受くるに至つた後と雖も尙ほ持續して、大體上カント前の近世哲學全體を通じての特徴となつて居る。大陸哲學に於てはデカルト學派中にもなく神祕説の影響が認めらるゝに至つた。即ち機會因論者やマルブランシといふ様なデカルト學派中の有力なる代表者又は其發展者は皆な著しく神祕的傾向を帶び

る様になつた。次に徹底した純理論と神祕説とを結付んとした最クラシカルな典型と見らるべきスピノーザが出でた。ライブニッツの哲學は宗教と新興自然科学との調和を以て中心目的とし、而して其「モナド」論には深遠なる神祕的觀念が伏在して居る。此の如く大陸哲學はデカルトより漸次發展し行くに連れて次第に近世の個人精神覺醒の第二の契機を取入れる様になつたのであるが、併し自然科学の方法的自覺に基いた方法上の立場は依然として保持されて居る。即ち大陸哲學に於ては數學的演繹の方法をば形而上學問題に適用せんとし、英國に於ては直接觀察及び經驗的歸納の方法をば、從來の自然科学の領域に屬して居ない精神現象の研究に適用して、心理學や倫理學や認識論(實を言へば此時期の英國の認識論も倫理學も心理學の一部である)をば經驗的に論究して、此處に哲學特有の領域を置かんとするといふことを主要な傾向として居る。

此の如き事情に基いてカント以前の近世哲學は經驗派も純理派も自然



科學的の考へ方を哲學問題に適用した。併し其結果として古來哲學の重要對象となつて居る價值を取扱ふには不適當となつた。吾々は自然科學者としては全然價值といふとを離れて物を見ることが出来る。否、其れが自然科學的考へ方の本領である。併ながら人として、殊に哲學の研究者として吾々は價值を離るゝとは不可能である。殊に吾々は、吾々の自然的要求に基くところの所謂欲望價值(Behufswert)又は利用價值(Nützlichkeitswert)の外に理想的要求に基くべき Sollen の感を伴ふところの眞善美の理想價值又は理性價值(Vernunftwert)の意識を有し、而して此理想價值が古來哲學の重要問題となつて居るといふことは、美學だけは其 Aesthetik なる名稱も比較的後世に起り、其研究其者も重要視せらるゝに至つたのは比較的近世のことであるが、併し論理及び倫理の二學は上古以來思考の規範及び意志及行爲の理想的評價の學として哲學の重要部門を形造つて居つたといふ事實を以ても知ることが出来る。哲學は上古以來最廣汎なる意味に於て世界觀を

立てることを目的とする。併し世界は現實の外に價值を含む。現實及び價值の兩界を結付けて初めて世界觀は成立し得る。カント前の近世哲學に於ても亦た理想價值の研究は重要な問題となつて居る。即ちカント前の近世哲學は價值を論ずることの出来ない考へ方に依て價值を論せんとしたのであつた。此矛盾を指摘して出でたものがカントの批判的方法である。

四

其性質上沒價值的の世界觀及び人生觀に了るべき自然科學的の考へ方と、哲學として棄てることの出來ぬ價值觀との乖離はカント前の近世哲學に種々の興味ある形を以て現はれて居る。先づ純理學派に就て見る。

カント前の純理論的形而上學者は皆な認識論上實在論の上に立つて居る。即ち純理的思考の結果が直ちに形而上的實在の眞を示すといふ豫想の上に立て居る。従つて彼等の中に徹底した數學的方法が採用さるゝに



従つて實在其者が又た數學的に決定せられて居るといふ結論となるは自然である。此方法觀と世界觀との並行の最顯著なる例はスピノーザ哲學である。即ちスピノーザは其方法に於て最嚴密なる數學的方法を取て居ると共に其世界觀が又た徹底した數學的決定論である。而して數學的の考へ方が徹底して沒價值的である様に、其世界觀や人生觀も徹底して沒價值的でなければならぬとスピノーザは要求する。幾何學者は毫も三角形の三内角の和が二直角に等しきは何の爲めであるか、又た善であるか惡であるかを問はぬ、唯三角の本質中に斯の如き性質が必然的に含まるゝと、言ひかへれば三角形の定義よりして必然的に斯の如き性質が導出さるゝことを示すに止まる。幾何學者が形に對する此態度を以て自然人事一切の事象に對し、價値や目的を離れて萬有を見る、それがスピノーザに取つては真正の認識である。スピノーザは一切の人間の行動を、嘲らす、悲ます、はた厭はず、唯理解するを以て哲學の職とした。「愛、憎、憤怒、嫉妬、名開心、共悲等其他

の情念をば人性の過失と見ず、唯、恰かも熱さ、冷たさ、嵐、雷等が大氣の性に固有なると同様に人性に固有なる性質として見、而して此の如き見方を以て眞の哲學的の見方とした。吾々は普通想像「*imaginatio*」に支配されて關心的に、即ち價値や目的の觀念に支配されて萬有を觀る。其結果として偶然、自由等の妄念が起り、嫉妬、恐怖、悔恨、憎惡、失望といふが如き吾々の心を攪擾すべき情念が生ずる。若し幾何學者が點線、面、形を見ると同様に、即ち無關心的に自然人事一切の事象を見るならば、此の如き情念の起るべき餘地は無い理である。自然現象を初として自己及び他人の一切の心身上の活動は凡て神の必然の様態であるとする所の哲學者に取ては、一事として憎惡すべきものもなく、笑ふべきものも、憐むべきものも、悔恨すべきものも無い。理性の絶對の立場より見ればネローの罪惡と雖も善でもなければ惡でもない、單に必然の動作である。

即ちスピノーザの世界觀の核心は數學的決定論、徹頭徹尾價値や目的の



概念を離れて一切をば唯必然と見るといふとにあり、其人生觀は明確なる自然主義であるが、併し其の背後には強烈なる理想主義が潜んで居る。此一面は第一にスピノーザ哲學の心理的動機を窺ふに最切要であると見られて居る「知性改良論」De Intellectus Emendatione に最鮮かに現はれて居る。スピノーザは下の様に説いて居る。人生の凡ての不安や苦惱は有限物に對する愛より起る。「吾々が愛せぬものに關しては不和争亂の起るべき理はない、たとへ其れが消滅するとも何等の悲哀も起らざるべく、他人が其れを所有しても何等の嫉妬も起らざるべく、何等の恐怖も、何等の憎惡も、要するに何等精神上の擾亂不安も起らぬであらう」。吾々は富を愛し、位置を愛する、格段の人、格段の物を愛する、要するに生滅無常の有限物を愛する。其故に其富や、位置や、格段の人や物やが消滅すれば悲み、他人が有すれば羨み、妬み、惡み、喜怒哀樂の情に支配される。併し、永恒無限なるものゝ愛は淨き法悦を以て精神を養ひ、一切の不快を離脱する。此の如き愛は「最願はしき

もの、全力を盡して欣求せざる可らざる者である」云々。即ちスピノーザは茲には力を入れて愛する價值あるものとその價值なきものとを區別して居る。而して其區別の標準は崇高なる理想主義である。併し、此價值はカント一派の主張するやうな無制約的な絶對の價值ではない、ならば、附きの價值である、解脱や淨福を欲せざるものを拘束することは出來ないと解し得られぬでもない。併ながら「エテイカ」によれば、スピノーザの此實踐上の價值觀は嚴密なる認識に基いて居る。而して彼れが認識上に於て絶對の眞を認めたことは疑ふべき餘地はない。理性(Reason)や無關心的な數學的な考へ方は、淨福や解脱に必要な方便として初めて價值があるのでなくして其自身に價值を有する。想像(Imagination)や關心的な考へ方は、淨福や解脱の途に横はる障礙であるから排すべきものでなくして、其自身誤謬の淵源である。沒價値的世界觀は其儘世界の眞を示す絶對の眞理である。純理的思考(思惟)の場合では數學的な無關心な考へ方の眞をば制約的と見



ることはカント前の獨斷的純理論、殊にスピノーザ哲學の基調と全然相容れざる見解である。スピノーザは徹底した沒價值觀を主張しつゝ、之に唯一最高の價值を認めて居る。一方、妄念も罪惡も善でもなければ惡でもなく、唯必然の動作であると説きながら、他方十全觀念と不十全觀念、無關心的の見方と關心的の見方、「理性」と「想像」との區別を立て、後者を退けて前者に無上の價值を置いて居る。此點に於て彼れの沒價值觀は徹底して居ない、否、到底徹底することの出来ないものである。懷疑論が其自身の眞を固執する間は徹底しないと同様、沒價值觀は其自身の唯一の價值を主張する間は徹底しない。

此の如くスピノーザ哲學は一方徹底した數學的決定論で自然主義で沒價值觀であることを標榜しながら、其根柢又は背景には強烈なる理想主義と價值觀とを藏して居る。スピノーザ哲學にユニークな點は實に此兩極を結付けたことにある。此兩極の思考動機、即ち近世の自然科学的思潮より

來つた數學的、純理的な考へ方と、スピノーザの幼時に受けた猶太教的教育やネーデルランドに榮えて居つた神祕主義の精神より來つた宗教的憧憬とはスピノーザの異常なる人格の坩堝の中に於て結付けられ溶けあつて居る。此處にスピノーザ哲學のユニークな點はある。若しスピノーザの思想が前者のみに支配されて居つたならば彼は普通の自然科学的決定論者に過ぎなかつたであらう。其思想にはゲーテや、シルレルや、ノヴォリスや、其他の「ロマンテック」の哲學者やをインスパイヤするところの力はなかつたであらう。若しスピノーザの思想が後者のみに支配されて居つたならば彼は唯普通一遍の神祕論者とさしたる相違はなかつたであらう。スピノーザ哲學に異常なる點は即ち此普通結付くことの出来ない様に思はれて居る兩極を結付けた點に存する。併し其結付け方は尙ほ不完全である。スピノーザの純理的實在論の立場に於ては、此兩極は兩立することは出來ない。總じてカント以前の純理的實在論によれば、前にも述べた様に純



理的思考の結果は其儘實在の眞を寫す、其れは單に吾々の物の見方であるに止まらずして物の存在の仕方を示す。機械觀と目的觀、沒價值觀と價值觀とは吾々の物の見方であるに止まらずして物の存在の仕方であるとするれば、矛盾律が效力を有する間は其れは調和して兩立することは出来ない。

## 五

カント前の近世純理派の哲學中で崇高な價值觀と自然科学的の考へ方に基いた沒價值觀とが親密に結付きながら而かもその乖離が最鮮かな形を以て現はれて居るのはスピノーザ哲學であるが、併し同様の乖離は他の哲學の中にも種々の形で現はれて居る。試みにデカートを取つて見る。デカートの場合には機械的決定論は未だスピノーザの場合ほど徹底した形を以ては現はれては居ない。デカートは知らるゝ如く物質的自然に關しては徹底した機械觀、決定論を唱導したが、併し精神には自由を認めた。

無機物は無論のこと、有機體と雖も人間以下のものは悉く無靈魂の物質であつて、従つて其動作は徹頭徹尾機械的に決定せられて居る、禽獸と雖も自働機械にすぎぬ。併し人間のみは肉體と精神との結合であつて、従つて人間ののみは自由を有する。精神の動作と雖も機械的に行はるゝ部分はあるが、併し其中に自由なる部分がある。従つて此部分には數學的、自然科学的方法は適用されることは出来ない譯である。それだけデカートの自然科学的方法の適用は不徹底に終つて居ると言はねばならぬ。

而してデカートは此不徹底の圏域に於て、一方理性に指導されたる自由意志に依ての情念の制御を主眼とする「ストア」流の倫理説を説き、他方誤謬の起原を説明せんとした。デカートに依れば眞理の標準は明晰と判明とにある。理性が明晰で判明に認める表象は眞である。然らば誤謬は如何にして起るかといふに、デカートによれば其れは理性其者より起らずして自由意志より起る。自由意志は理性の認容する範圍のみに満足せずして、



理性が明晰判明と認むる範圍を逸脱して判断を下さんとする。然るに意志自身は理性と異つて盲目である。眞妄の差別を認めない。其故に容易に迷路に入つて妄を擇んで眞を棄てる様になる。誤謬の根源は意志の盲動にある。

此デカートの思想に吾々は興味ある乖離を認めることが出来る。若しデカートが其實在論と自然科学的方法とを充分に徹底せしめるならば、デカートが特に人間のみにあつて人間が他の生物に優越して居る點と認めると共に又た誤謬の根源と認めた意志の自由は承認することは出来ぬ譯である。若し自由が承認されないならば、べきは無意義となつて其理想主義的の倫理説は不可能となり、誤謬の存在は不可解となる。デカートは眞妄善惡の價値の別を立てんが爲めに意志の自由といふことに訴へたが、併し之と共に彼れの自然科学的の考へ方はそれだけ不徹底に了つた譯である。即ちデカートの場合にも自然科学的の考へ方と價値觀との間には乖

離がある。

## 六

ライプニッツの「モナドロギー」はスピノーザの決定論に基いた沒價値觀に反對することを以て其主要動機の一として居る。ライプニッツによれば、若し物皆な従つて吾々の行動までも、定命によりて決定して居るとすれば、道徳上の精進努力は全く無意味のものとなり了らねばならぬ。吾々の精神は自由の感念を有し、自己の力に依て活動を營み、而して此自己の活動に對して責任を感じる。これは吾々の精神が自由なる活動の中心であることを暗示するではないか。若し吾々の精神が自由の活動の中心でなく、其活動は悉く其れが屬する全體、即ちスピノーザの所謂實體に依て決定せらるゝとすれば、個人の道徳上の責任といふことは成立の餘地はない理である。一切を一實體の必然の様態と見るスピノーザ説は全然吾々の道徳的感念



に背戻する。といふことがライプニッツのスピノーザに對する批評の一面である。此非難を一の理由としてライプニッツは、相互に絶對的に獨立な、自由なる活動と努力の中心であるところの無数の「モナド」を想定するに至つたのである。

併ながら次第に論述を進めて行くうちにライプニッツの「モナドロギー」は何時の間にか、決定論たる點に於て殆どスピノーザ説と選ぶところが無い様になつて居る。而してこれは實に彼れが、一方精神の自律といふことに對する強き要求を有しながら他方カント以前の近世哲學に共通な、自然科学的な決定論的の考へ方の支配を脱するを得ざりし必然の結果にすぎない。スピノーザに於て頂點に達した純理論的實在論的の考へ方はライプニッツに至て頗る緩和されて來た。スピノーザの場合に於ては思考上の必然と實在上の必然とは全然同一であつた。宇宙間の事實が現にある様にあるのは悉く幾何學的必然である、即ち吾々がしか考へざるを得ぬといふ様に

なつて居るのである。幾何學上の命題に於て反對のことが如何にしても考へられないと同様に、世界の事象も亦た其反對のことは如何にしても考へられない。然るにライプニッツは知らるゝ如く真理をば二種に區別し、而して之に對應して又た必然に二種の別を認めた。第一はライプニッツが幾何學的又は形而上學的真理と呼んだものであつて、第二は事實的真理と呼んだものである。例へば三角形の三内角の和が二直角に等しいといふことは其反對のことは如何にしても考へることは出來ない。それを考へることは矛盾である。併し、今日雨が降るといふことは其反對のことが考へられ得る、今日晴天であると考へても決して矛盾でない。今日雨が降るといふことは思考上の必然ではなくして、唯他の事實によつて必然にされたのである。前者は幾何學的必然であつて、後者は事實上の必然である。前者は絶對的又は無制約の必然であるが、後者は制約的又は假定的必然である。前者は或概念其者の中に本來包含されて居る必然であるが、後者は他の事



實を待つた必然、即ち甲なる事實があるから乙なる事實がなければならぬといふ必然である。前者を支配するものは矛盾律で、後者を支配するものは因果律即ちライプニッツの所謂充足理由律である。

此の如くスピノーザの純理論的實在論はライプニッツに於ては餘程緩和されて來たが、併し必然觀であるといふ點に於ては同一である。自然人事兩界の事實はスピノーザの場合の如く思想上必然ではないが、併し事實上必然ではある。矛盾律によつて必然ではないが理由律によつて必然である。此必然觀は第一にライプニッツの形而上學、即ち「モナドロギー」に於て已に著しく現はれて居る。ライプニッツの「モナド」には窓がない、他より何等の影響をも受けず、又た他に何等の影響をも與へない。即ち一の「モナド」は他の「モナド」に對して絶對的に自由である。併し物はみな嚴密なる理由律に支配されて居る。「モナド」は絶えず轉化するが、其一状態は其れの前行状態の必然的結果であつて後續状態の必然的理由である。其故に人間の精神と雖

も、他の物に支配されぬといふ意味、外的拘束を受けぬといふ意味の自由は有するが、併し必然といふことに反對の意味に於ける自由は有しない。此點に於てライプニッツの「モナド」はスピノーザの實體と同一である。これが即ちライプニッツの「モナド」論が自律的決定論 *autonomischer Determinismus* と呼ばるゝ所以である。

のみならず、更に此「モナド」説をばライプニッツの神學と結付けて考へて見れば、ライプニッツの決定論は更に徹底して來る。ライプニッツによれば「モナド」は神の造化である、其有する所の獨立は神によりて賦與された獨立である。「モナド」間に存する調和は神によつて豫定された調和である。其故に「モナド」の有する自律は其根源に溯れば他より與へられた自律である。従つて「モナド」の自律的決定は其根源に溯れば神に依て決定されたものである。

最後に然らば其神の意志は自由であるかといふに、さうでない。ライプニッツの神は「ジェスート」やスコートゥス學徒の神ではなくしてトーマス學徒の神



である、其意志は眞及び善の理法に依て決定せられて居る。ライブニッツによれば人間の場合に於ては別となつて居る思考上の必然と事實上の必然とは神に於ては一である。「ジエースト」及びスコトッス學徒の神が自己の任意の意志によつて自然法、道德法を造り、破棄し、若くは左右し得べき權能を一手に掌握して居るに對して、ライブニッツの神は不變の理法に従つて行動する。即ち前者を專制君主にたとへれば、後者は立憲君主にたとふべきである。

今此見解をスピノーザ説と比べると、ライブニッツの神も必然的で決定せられて居る點に於てはスピノーザの實體神と同一である。而して之を豫定調和説と結付けて考ふれば、個物の活動は全然神の此必然の意志に依て決定せらるゝといふ結論となる。ライブニッツとスピノーザと異なる點は唯、ライブニッツの神は超越的なるに對してスピノーザの神は内在的、ライブニッツの神は人格的意志を以て活動するに反してスピノーザの神は人格を有せぬといふ點にあるのみ。スピノーザ説は汎神論であるに對してライブニッツ

説は理神論であるが、併し決定論たる點に於ては同一である。

ライブニッツが一方に於ては精神、或は更に一般的に凡ての「モナド」の自律といふ觀念を重視し、道德的のべきを救護することを其哲學の主要動機の一としながら、而かも之に矛盾して決定論に陥つて居るのには種々原因はあらうが、併し其重要なるものゝ一として彼れが自然科学的考へ方に支配されて彼れの所謂充足理由律をば根本豫想として居ることを挙げねばならぬ。而してライブニッツが其辯神論で説いた最善觀に於ける價值の平等觀又は相對觀は此決定論と密接に關聯して居る。但しライブニッツは自然科学と神學、機械觀と目的觀との調和といふことを其中心目的として居つて、目的觀に即して機械觀を説き、若くは後者を前者に隸屬せしめんとして居るのであるから、其の價值の平等觀又は相對觀は精神必然的の考へ方と共通の性質を有し來り、即ち汎價值觀の形を取つて居る。スピノーザは一切を沒價值的に、唯々必然と見たのであるが、ライブニッツは一切は決定されたる



眞及び善の理法に従ふ神意の結果であるから、一切の個物は全體の目的の實現に對して必然の意義、價値を有すると見んとした。彼が物理的惡及び道德的惡を形而上學的惡に還元し、有限物に避く可からざること、見而して是等は部分の立場より見れば惡であるが併し全體より見れば悉く善である、例へば藥味が全皿の風味を増すが如く、不調の音が全音曲の美を高め、るが如く、影が繪畫全幅の美を引立たせて見せるが如く、部分的に見て惡なるものも全體より見れば悉く善であると説いたのはその形而上學的立場の必然の結果である。カントは其批判前期に於て「ライプニッツ・ラルフ哲學を奉じて居つた時期には全然此最善觀を採用して其「最善觀論」 Versuch einiger Betrachtungen über den Optimismus を書いた。ボロースキの傳ふるところに依れば、カントは批判期に入つて極端に此書を嫌つて、人の此書のことを話題に上することを忌み、且つ見付け次第之を破棄せよとまでボロースキに命じたといふ。クーノー・フイッシャーの解するところによれば、此最善觀は、

論理的論證が形而上學的妥當性を有するといふこと、及び宇宙全體が人間認識の對象となり得るといふことの二事を豫想して居る、然るに批判期のカントは全然此二豫想を破壊した、カントが批判期に入つて心からして此書を忌んだのは之に依るのであるといふのであるが、併し此二項が有力な理由であることは無論許すとして、尙ほ他にカントが此書を忌むべき重要な理由があることを記憶せねばならぬと思ふ。それは即ち、此最善觀は價値の平等觀又は相對觀である、之に反して價値の「アンティノミー」即ち根本的對立が批判期の思想の根本豫想且つ中核となつて居るといふことである。

要するにライプニッツ哲學は初はスピノーザの決定論、沒價値觀に反對して起つたものであるが、其實矢張り決定論で、矢張り一種の價値の平等觀或は相對論に了つて居る。スピノーザは徹頭徹尾價値を離れて物を見るといふことを標榜して居るが、其實其根柢又は背景には強烈なる價値觀がある。ライプニッツはスピノーザの決定論と沒價値觀に反對して出發して居るが、次



第におのづから決定論に陥り價值の平等觀又は相對觀を説くに至つた。

## 七

此時期の英國哲學に於て最獨創的な、最よく英國特有の傾向を代表する思想家と見らるべきロック及びヒューム(他の英國の代表的哲學者たるホッブスは大陸の數學的純理論の影響を、パークレーは大陸の神祕哲學殊にマルブランシの影響を著しく受けて居る)は形而上學を問題として居らぬ。ロックは多少形而上學問題に接觸しては居るが、併しそれは唯其中心問題たる認識論々究の序でに論及したのみであるし、ヒュームは從來純理的形而上學の基礎となつて居つた實體概念及び因果概念に對する消極的批評の結果明白に學としての形而上學を否定した。従つて是等の英國哲學に於ては自然科學の考へ方を徹底して形而上學に適用した結果たるスピノーザ哲學のやうな思切つた決定論的な、機械觀的な、沒價値的な世界觀を見ることが

出來ぬのは當然である。併しロックもヒュームも認識論を哲學の中心問題とし、而して之をば全然自然科學的即ち心理學的に研究した結果として、カント前の近世哲學中カントの批判法に對して最直接的な最切要な關係を有することゝなつた。此兩家の哲學は第一に單に認識論を中心問題としたことによつてカントの批判哲學に對して積極的關係を有し、第二に其認識論の方法が自然科學的であつて認識論の問題其者に相應して居らぬといふことに依て之に對して消極的關係を有する。

カントの批判哲學の特徴として吾々は二つの重要な事項を擧げることが出来る。第一は、哲學の研究は認識能力の批判に依て其權能及び限界を論定することより出發せねばならぬとすることである。之は知能の限界を吟味せずして直ちに形而上學問題の論究に入つたカント以前の獨斷的形而上學に反對する特徴であるが、併し批判哲學の此様相はカントの獨創ではなくして其端を開いたものはロックである。ロックが斯の如き意味に



於て批判論を創説したのは、一つは思辨と空想を嫌つて着實なる經驗を尊ぶといふ英國々民性、殊にそれが最著しく現はれて居るロックが、獨斷的にして思辨的な大陸哲學に對して感じた不満足の結果であると共に、當時英國の實際生活(政治上及び信教上)を支配して居つた時代精神の一主要契機であり而して殊にロックによりて最よく代表されて居つた、自ら自由を制限して其制限内に於て十分の權利を獲得せんと欲するといふ強烈なる要求(英國に發した立憲政治はその一の結果である)の並行現象であるとして説明され得るのであつて、批判哲學の此様相は英國を其原産地と見ねばならぬ。即ちカント哲學の此様相はロック及びヒュームの哲學と共通の特徴であつて、此兩家の積極的影響の結果と見ねばならぬ。

カントの批判哲學の第二の主要特徴は、先づ第一に知次に意及び情の三面に亘つて吾々の精神に存する超個人的の先天機能を探求することをばその中心目的として、而して此目的に適合した新方法を案出したことであ

る。批判哲學の此様相は、早くよりして純理哲學中に存して居た古代に溯ればプラトーンに起原を有する(が併し尙ほ十分に洗練されて居なかつた生得觀念又は先天觀念の思想と、嘗て獨逸神祕説の中心觀念であり、近世に入つては機會因論やマルブランシ等の神祕哲學に復活し、且つ神祕説の系統を受けた宗教的信仰中に不明確な形を以て生命を保つて居つた、超個人的な規範の淵源者を吾々自身の内に認めるといふ思想(即ち理性の自律の觀念)とが、學的に發展され精鍊された結果であつて、而してカントの獨創的思想は専ら此様相に現はれて居る。殊に其方法は全くカントの新しき案出にかゝつたものであつて、後世の哲學の考へ方を全然一新する端を開き、而して吾々の題目に對して最切要な關係を有する。

## 八

カントの創見は唯認識論を研究したといふ點でもなければ、哲學の研究



は認識論を以て出發せねばならぬとした點でもない、認識論は認識の價値を吟味する學である、而して認識の價値を吟味せんが爲めには從來の認識論の取つた方法は全然無効であるとして特有な方法を案出した點にある。カント以前の認識論も眞偽の詮義を問題として居らぬではない。併し其方法は前に述べたやうに心理學的であつた。併し單に心理學のみより見れば眞の思考も偽の思考も平等に心理學上の事實であり、等しく心理學上の法則に従つて起つたものである。又た或思考が眞であるといふことはそれが意識されて心理的事實となるや否やには全然無關係であり、又た如何なる經路を履んで意識さるゝやうになつたかといふことから全然獨立である。其故に記述的心理學や説明的心理學では思考の價値は分らぬ。従つて認識論が認識の眞理價値を吟味する學たらんが爲めには精神の本性とか觀念の起原とかに關する豫想より出發せずして何人と雖も承認せねばならない認識の理想概念を以て出發せねばならぬ。とカントは考へ

た。此理想概念は即ちカントの認識論の中心問題となつて居る、概念の分析に基かずして而かも必然的で普遍妥當的な表象結合、即ち彼れの所謂先天總合判斷である。

先天總合判斷の探求といふことはカントの認識論の中心問題であるが、併しカントは單に認識の領域に於て此種の判斷を探求したのみでなく、人間意識の凡ての領域に亘つて、即ち道德意識、美意識等に亘つても此の如き先天原理を探求した。知情意の三面に亘つての理性の普遍妥當的な先天原理の探究、これがカントの全哲學の中心問題である。カントによれば吾々が眞と稱する思考が他の表象結合と異なり、善と稱する動機作用や行動が他の利害得失に支配された動機作用や行動と異なり、美感が感性的の快不快や好惡等と異なる點は必然的で普遍妥當的である點にある。但し此處に言ふところの必然性及び普遍妥當性は事實上の必然性及び普遍妥當性ではなくして理想上の必然性及び普遍妥當性である、即ち凡ての人が現



實にしか考へ、意志し、感ずるといふ意味でなくして、凡ての人がしか考へ、意志し、感ぜねばならぬといふ要求又は感じを伴ふといふことである。偶然的の表象結合や利害得失に支配された意志作用や感性的の快不快等には凡ての人が同様に思考、意志、感情せねばならぬといふ要求は伴はぬ、之を伴ふは眞、善、美の特性である。斯の如き要求が正當ならんが爲めには、是等の知情意の活動の根柢に存し、此要求に權利を與ふる、從つて其自身普遍妥當的な、從つて先天的な原理がなければならぬ。此の如き原理を知情意の三面に亘つて探求するといふことがカントの批判哲學の中心課題である。

此の如き先天原理は自然意識又は經驗意識と呼ぶるもの、即ち自然的に起るところの吾々の知情意の活動に對して之に合致すべしといふ命令を下して、之を評價し、規正する。カントは之を先天規則 (Regeln a priori) と呼び、今日の西南獨逸派は之を表はすに主として規範といふ語を用ゐて、カント哲學の中心問題は規範意識の研究であると説く。自然的又は經驗的の

表象活動が此の如き先天的の眞の規則に契合して初めて學的判斷が成立つ、即ち此表象活動は之に依て初めて眞であるといふ要求をなす權利を有する。「自然的又は經驗的の意志活動が此の如き善の先天的規範に契合して初めて道德が成立ち、自然的又は經驗的の感情活動が美の先天的規則に契合して初めて趣味の判斷が成立つ」。從つて自然科学的の世界觀、即ち決定論的な、機械論的な、沒價値的な世界觀はカント前の哲學の見たやうに實在の模寫といふ性質のものでなくして、與へられた雜多の感覺が此の如き主觀の先天的原理に合致した、或は是等の先天原理によりて選擇、加工された結果である。自然科学者の世界は言はゞ理性が實體永存律とか因果律とかいふ様な先天的基礎の上に之に適合するやうな材料を選擇利用して築き上げた建物である。否な、カントによれば單に此の如く科學的に精鍊された世界觀のみならず、吾々が對象と呼んで居る世界は是等の先天的な超個人的の機能、即ちカントの所謂意識一般が無意識の間に生み出した産



物に外ならぬ。自然科学者の造り出すところの世界は唯、吾々の普通の意識に於てカントの所謂範疇として無意識の間に適用されつゝあるところの先天的超個人的機能が意識的に完全に、方法的に適用された結果にすぎぬ。其故に自然科学の任務は飽くまで決定論的な、機械觀的な、沒價値的な見方を徹底せしめるにある。自然現象をばそれが充たすべき目的よりして説明するといふことは自然科学としては墮落である。自然科学的認識は自然界に於ける凡ての事象を唯その原因より説明することを本領とするのであつて、目的の概念に訴へるといふことはその自殺を意味する。

斯の如く、カントによれば、自然科学的の考へ方の結果である機械的な沒價値的な世界は理性の一定の先天的原理によつて與へられたる感覺の材料が加工された結果であるから、若し或他の先天的原理を基礎とするならば又た之とは異なつた世界が成立し得るといふ餘地が生じて來るのである。無論此世界觀が學としての價値を有せんが爲めには其先天的原理は

個人的のものではなくして超個人的、即ち普遍妥當のものではなければならぬ。斯くして自然科学の考へ方は其自身の世界に於ては十分の權利を有する。併し其權利には限界がある。即ち唯現實を對象とする自然觀たることは得るけれども世界觀たることは出來ぬ。何となれば世界は現實と價値との双方を含んだものであつて自然又は現實よりも廣延が大であるからである。

## 九

カント哲學は哲學史上に大革命を持來し、不朽の價値を有する多くの獨創の思想を含むで居るが、併しそれには尙ほ種々の不備の點があつた。一方に於ては獨斷哲學、傳承的信仰、啓蒙思潮、心理學的認識論等より來れる、カントの中心思想とは調和が困難である不純な混淆物がある。他方に於ては、カントは理性の機能、例へば感性、悟性、理性とか、若くは悟性内に於て十二



範疇の先天機能といふ様なものを區別したが、併し其間に組織と統一とを缺いて居る。此二つの不備の點を補正して、カントの中心思想よりして不純な混淆物を淘汰し、カントが發見した種々の理性機能を一根本原理より派生して之に組織を與へるといふことがカント後の多くの哲學者の中心問題となつた。第二の缺點を初めて指摘してカントが歸納的分析によつて末端より發見したものをば中樞よりして演繹せんとしたものはラインホルドであるが、併し彼れのカントの理解が極めて淺薄であつた結果として此企圖も意義ある結果を持來さなかつた。フイヒテはラインホルドの企圖を承けてカント説の凡ての方面をば一根本原理より導出さんとして其特有の方法を案出した。

フイヒテは考へた。吾々の種々の理性活動の組織的聯絡を理解せんが爲めに自然法的必然性に依て其中の一をば他の者より導出すといふ方法に依るは不可である。言かへれば、甲の機能があるから乙の機能があるとい

ふやうに論じて行くとは出来ぬ。何故かなれば、純粹理性批判によれば此自然法的必然性は單に現象界の理性の形式にすぎないから之を理性の機能其物に適用することは出来ぬ。理性活動の組織的聯絡は唯、理性の絶對的原理其者よりしての外は導出さるゝことは出来ぬ。その理性の絶對的原理とは即ち目的の外にはあり得ない。即ち理性の種々の機能の有機的關係は、理性の終極目的を認めて一々の機能はこの終極目的の實現に必然なる手段であるといふことを示すことに依て初めて知られ得る。これが即ちフイヒテの目的觀的方法と名けらるゝものゝ根本思想であつて、フイヒテの重要な創見の一であるが、併しそれはカントの「實踐理性の上位」をば徹底して學理理性に適用したものであつて、其の淵源は矢張りカント哲學にあるのである。斯くてフイヒテは理性の最高目的よりしてその一切の活動をば之に對する手段として導出すといふことをば「知識學」の全任務として、カントが直覺、概念、根本原理、理念、格率、規則等と呼んだものをば悉く意識全



體の任務或は課題よりして此任務を果たし行くべき必然の手段として「演繹して、理性の最高任務を果たさんが爲めに必然的なる目的論的體系として示さんとした。

斯の如くしてフイヒテがカントの精神を發展して批判的方法の目的論的性質を明かに認めたといふことは偉大なる成績であつて、カントの批判法を洗練し、整齊し、不純の混淆物を淘汰して之に組織と統一とを與へんが爲めに取りべき必然の途を開いたのであるが、併しフイヒテの此思想は「ロマンテイク」期の所謂思辨的觀念論派(フイヒテ、シェリング、ヘーゲル等)に共通なる先天的構成法 *Methode der apriorischen Konstruktion* と形而上學とに防碍されて順正なる發展を遂げることが出来なかつた。

## 10

フイヒテの目的論的方法が順正なる發展を遂げ得なかつた理由の第一は、

フイヒテが此方法を遂行せんが爲めに取つた圖式シエマが辨證法の形を取つたといふことであつて、而してそれは此一派に共通なる先天的構成法の一つの現はれである。經驗を無視して理性活動の種々の形式なり、自然及び人事の諸種の現象なりを先天的に構成して行くといふことは所謂思辨的觀念論派の共通特徴であつて、此一派の哲學者は多くの場合之を「演繹する」と言つて居るが、併し其方法はカント前の純理派の取つた様な普通の演繹法ではなくして、哲學者によつて多少の相違はあるが廣汎な意味を以て「辨證法」といふ名稱を以て總括し得られるものである。而して其端を開いたのはフイヒテである(其暗示は已にカントの範疇表中に含まれては居る。第一論文参照)。フイヒテは考へた、一切の理性の行動が一の根本的課題の遂行に對する手段の體系として見らるゝとすれば、理性其者の内に其課題と其れの實行との間に常に矛盾がなければならぬ。何故かなれば、カントが若し道徳法が完全に實現さるゝならばそれは無對象となると説いたと同様に、此



課題と其れの實行との完全なる一致は理性の機能其者を無用とするからである。理性の課題と其れの實行との間に常に矛盾があり、理性の凡ての活動は常に到底到達することの出来ぬべしに動かされて進んで行く。斯くて課題と之を充たさんが爲めの第一の實行との矛盾が第二の行動を必然とする、併し此第二も亦不十分であつて第三の行動が必然となる、此の如くして種々の理性活動が目的觀的必然的に「演繹」される。これが即ちフイヒテの目的觀的方法の取つた圖式である。

フイヒテの此の如き方法の提唱はヘーゲルに至て發展の頂點に達した辨證法の端を開いたのであつて大なる史的意義を有つて居るのであるが、併し毫も經驗的材料(心理學や人文科學の供給する)の助を藉らずして純思辨的に多様の規範や公理を「演繹」することは不可能であつた。無論規範や公理の妥當性を經驗的材料に基いてきめるといふことは出来ぬ。それは頓て心理學的方法に逆もどりすることを意味する。併し吾々が格段なる規

範や公理を意識して之をば目的論的に基礎づけるといふことに對して機會を與へるものは心理學や歴史の科學によりて經驗的に與へられたる材料でなければならぬ。此事に就ては尙ほ後に述べなければならぬから此處では觸れずに置く。

フイヒテの目的觀的方法の重要な意義が滅却されて順正なる發展をなすことの出来なかつた第二の重なる理由は、辨證法と等しく而して之と密接に關聯して、フイヒテに端を開いたカントの發見した超個人的理性の形而上學化が漸次發展した結果、價値の平等觀又は相對觀となり、若くは之を誘致したことである。併し此事を述べる前に暫く「ロマンティック」期に於ける思辨哲學の一般特徴に就て少しく述べる必要がある。

## — —

「ロマンティック」期の哲學の主潮を形造つて居る、カント哲學發展の正系と



見做されて居る、普通思辨的唯心論といふ名稱の下に總括せらるゝ、フイヒテ、シエリング、シュライエルマッヘル、ヘーゲル等の哲學に共通な最切要なる中心特徴は、カントの發見した超個人的理性を形而上學化して宇宙根柢の位置に高めたといふ點にある。是等の哲學に共通な他の主要特徴、形而上學的唯心論であること、經驗を輕んじて先天的構成の方法を取るといふこと、カント前の哲學の一般傾向であつた機械觀を排斥して徹底した目的觀を取り自然若くは歴史上の各現象若くは各現象種が全體の目的の實現に對して有する意義又は旨趣を示すことをばその哲學的説明であるとするといふが如きことは、是等の特徴が現はれて居る程度は哲學者によつて多少づつ異なる、併し是等が強い傾向となつて居るといふことは、何れの哲學者に就ても言はれ得る、皆な此一中心特徴の當然の結果であると言へる。唯是等の哲學者の性格又は内的體驗の相違によつて此超個人的理性が種々異なつた賦彩を帯びて現はれて居るといふ點にその哲學說の特異性の根

源があるのである。

「ロマンテック」運動は言ふまでもなく文藝家を中心として起つたものであつて、その中心特徴は最一般的に言つて客觀主義に反對する主觀主義であるといひ得る。フイヒテが初めて「我」を「絶對化」した時にその哲學が特に「ロマンテック」の哲學と呼ばれて「ロマンテック」の文士の間には歓迎されたのは之によるのである。併し主觀主義といふ語は種々に解せられ得る。カント説も亦た一種の主觀主義であるが、併し斯く呼ばるゝ場合のカントの主觀は理性即ち普遍妥當的の主觀である。然るに「ロマンテック」の主觀は感情を核心とするものであるから、普遍妥當的でなくして個人的、氣隨的（カプツヒ）のものと解せらるゝ傾向が強い。随つて「ロマンテック」は因襲主義、循俗主義に對して「我」の自律を主張するが、併し其自律はカントの自律が規範生活と一致するに反して寧ろ法則、規範を無視する無拘束の空想及び感情の不羈自由を意味する。「ロマンテック」が文藝上に於て形式の整齊、理義の明白とい



ふ様なことを尊重する擬古主義クラシシズムに反對して天才の氣隨の空想に至上の價値を置き、道德上の規範を輕んじて戀愛の自由を主張するといふやうなことは之より起つて來る必要の結果である。哲學は元來學といふ形を以て表はされるといふ其者の本性上斯の如き意味の主觀主義とは相容れざるものであるが、併し此時期の哲學はおのづから此思潮の影響を受けて、思想家が放膽に自己を絶對化するといふ、或は個人的な、天才的な當該思想家に獨特な内的經驗をば宇宙根柢に投射するといふ共通特徴となつて居る。

此時期の代表的哲學は多少づゝの程度の差はあるが、言はゞ抒情詩的と言はるべき通性を具へて居る。是等の哲學が吾々の精神を強く引つけるところの力の一部は此特徴から出て來るのであるが、其缺點も亦此處にある。

凡ての哲學は或程度に於て必ず其思想家の性格や體驗の特殊性を反映して居るのであるが、併し此時期の代表的哲學ほど鮮かに當該思想家の特殊の性格を反映して居るものはない。道德的情熱を生命として居る戰士

的なフイヒテは宇宙根柢を道德的のものとして、精神が無窮に自己に對して造り出すところの障礙を打破して無窮にその自由を實現し行くことによりて成立つところの道德的活動をば萬有の目的と見て、倫理的觀念論を説いた。空想の力に富んだ感情的な、藝術家膚のシェリングは宇宙根柢を藝術家の類推によつて見て、宇宙をば其根柢に存する神の靈妙なる空想よりして産み出さるゝ大藝術品と見、萬有の目的を美の創造と享樂とに置いて美的觀念論を説いた。敬虔なる「ビエティスト」の家庭に人となり、「ヘルンフット」の教校の感化を受けたシュライエルマッヘルは宇宙根柢をば不可思議な、神秘的な、絶對依憑感の對象と見た。陰氣な、絶えず暗い氣分に支配されて居りながら而かも生に對する強き欲望と執着とを去り得なかつたショーペンハウエルは宇宙根柢をば盲動的の生存欲と見て理想を否定した。情熱、空想、憧憬といふ様な此期の詩人や哲學者の通有性を缺いて居る、冷靜なる概念的思辨と客觀的考察とをその最顯著なる長處としたヘーゲルの哲學には流



石此の如き主觀的體驗の投射はない様に見えるが、併し又た他方より見れば、宇宙説明に不合理的餘剰の存することの否定すべからざることを認めつゝも、尙ほ宇宙根柢をば「理念」と見、萬有をば概念の發展と見て論理的觀念論を説いたのは、その特異な性格の反映と見られ得る。

のみならず、ヘーゲル哲學及び其他の此期の思辨的形而上學の根柢となり出發點となつて居る理性の形而上學化といふことは、認識の領域に屬せずして寧ろ信仰の領域に屬する。無論その信仰は吾々の良心の體驗に根柢を有するものであつて空想とか迷妄とかいふ種類に屬するものではないが、併し嚴密に學的の事項ではない。直接の自明性を伴うでもなく、純粹な論證の事項でもない。哲學の頂點に進むに従つて徐々に此の如き形而上學に入るはよいが、又た哲學體系中に於て此の如き體驗や形而上學に一定の位置を配與する、即ち一定の限界内に於て一定の權利を與へるはよいが、併し無制約的即ち定言的に之を哲學の出發點とするは學としての哲學

の資格に背く。哲學の出發點は飽くまでも直接に自明的なることか若くは或方法によつて人を説服し得ることとでなければならぬ。さもなければ制約的即ち假定的の形を取らねばならぬ。カントの認識論の出發點は何人も承認せねばならぬとカントが考へた先天綜合判斷といふ眞理の理想概念である。カントは此理想概念は何人も承認せねばならぬと信じ、又た若し之を信せぬ者があるならば之を説服し得ると信じたであらう。併し若し假りに飽くまで此説服に應せぬ者があつたとすれば、カントは恐く、然らば汝はわが哲學に取ては無縁の衆生である、われは汝と共に哲學の研究に進むことは出来ぬ、と答へて之と引分れたであらう。併し「意識一般」を形而上學化し、宇宙根柢の位置に高めるといふことは第一に自明を缺き、又た論證も出来ない。さればと言つて之を假言的の形とすることも其本性上許さぬ。何故かなれば、先天綜合判斷の概念は吾々がこしらへる理想概念であるから、此の如き理想概念を有たない者は已むを得ぬ、それが爲すに任



せるといふことが出来るのであるが、併し形而上學的の立言は物の眞性に關するものであるから動かすべからざるものである。ヘーゲル其他の思辨的觀念論派の哲學者が其出發點よりして、寧ろ良心の體驗に根柢を有する斯の如き形而上學的豫想をなしたといふことも亦、「ロマンテイク」の傾向の一つの現はれと見られ得る。(理性の形而上學化が眞心の體驗に根柢を有するといふことに就ては後に説く)

ヘーゲルに於て認識上に於ける規範の源、自然界に對する立法の主たる「意識一般」が斯の如くして形而上學化され宇宙根柢の位置に高められ絶對者又は神と呼ばれるに至つた當然の結果は汎理論である。即ち現實的なものは凡て合理的、唯合理的なるものゝみ現實的である、といふ思想となる。而して此思想と共にカント及びフイヒテの哲學の根本特徴をなして居つた、理想の世界と現實の世界、あらねばならぬ世界とある、世界との反對は消滅せねばならぬ。カントに對しても、フイヒテに對しても、べきは吾々の道徳的精進の目標とはなるが併し永久到達することの出來ぬ天上の星であ

つた。然るにヘーゲルは此兩界の乖離を否定するを以て其思想の大切な特徴の一とした。ヘーゲルによれば此兩界の乖離は誤つた世界の見方に依て起る。若し此世界を合理的と見るならば現にある、ところの世界が頓てあらねばならぬ世界である、而して之と共に事實と理想との反對は否定せられる。現實の世界が理想又は價値の必然的な辨證法的發展である。此の如き立場の自然の結果として價値の相對觀若くは平等觀が誘致されて來る。更に進んで、變態の發展或は寧ろ墮落ではあるが、唯物論や價値の虛無説が引出される罅隙すら生じて來る。無論平等觀も唯物論も虛無論もヘーゲル自身の意識した企圖ではないが、併しべき世界とある、世界とが全然一致して一切は辨證法的の必然的發展であるとすれば、べきといふことは無意味とならねばならぬ。現實に對して評價の原理であり決定根據であるといふことを第一義とする規範の意義は滅却されねばならぬ。ヘーゲル哲學よりして、理想を否定する唯物主義や、凡ての史的現象に相對的



權利を與へる代りに又た凡てに絶對の價値を否定し現實に満足して理想的評價を避ける歴史主義が出でたのは自然の結果である。又ヘーゲルの辨證法をば極端なる懷疑論の根據に利用して、凡ての事肯定さるゝかと思へば忽ちにしておのづから破壊さるゝ、物は眞理として許容さるゝや否やそれは已に眞理でない、凡ての事に對して絶對的に肯定否定の態度を避けて絶對傍觀の態度を取る者が最高の眞理を有する者であると説いたバウエルエルの「絶對批判」の立場の如き、變態的發展ではあるが、ヘーゲル哲學が之に口實を與へたといふことは否定することは出來ぬ。

のみならず、ヘーゲルの汎理論の「現實的」のものは凡て合理的といふ原理によれば、自然界の凡ての内容が辨證法的に「演繹」されねばならぬのであるが、併し實際は唯大體の形式の外は「演繹」されることは出來ぬといふことをヘーゲル自身も明白して居る。自然界は極一般的の形式と法則との外は絶對理性から發展さるゝことは出來ぬ。自然界は、何時でも合理的に説明

されることの出來ぬ或剩餘、ヘーゲルが「偶然性の領域」と名けたものを残す。即ち、カントが物自體の感觸と呼び、フイヒテが「我」の自己制限即ち「無根據の行動」と呼んだものに相當するところの、純粹理性よりしては如何にしても説明することの出來ぬものである。汎理論者でないカントやフイヒテ、唯自然界の形式のみに對して理性の立法力を認めた形式的觀念論を説いたカントや主意説を取つたフイヒテに取つては、斯の如き不合理の領域を認めるのは當然であるが、併し汎理論者のヘーゲルに取ては弱點である。此點に於ても亦たヘーゲル哲學は、哲學は放膽なる「ロマンティック」の態度を改めて細心なる批判的精神に還り、先天認識の限界と或範圍内に於ける經驗的資料の必要とを認めねばならぬといふ消極的教訓を示して居る。

「ロマンティック」の哲學、殊にヘーゲル哲學は概念的ズルンゲイヒテの世界詩として見れば實に古今の偉觀である。又た其「論理學」と「哲學史」に於けるねばり強い細密なる概念的勞作と無私で犀利よる史的考察とは驚歎に値する。併し是等



の價值ある材料を活用せんが爲めには先づ之をして汎理論的形而上學及び辨證法といふ舊裝を脱せしめることを要する。

一一一

内界外界の事象の凡てに何等かの意義又は價值を認め、合規範ノルム・イ・イン・シ・ヒと反規範との反對を徹し、全然べきを離れて一切を観るといふ世界觀は尙ほ此期に於て後期のフイヒテ及びシュライエルマッヘルに依て代表されて居る。蓋し此の如き世界觀は宗教的體驗として種々の程度、種々の着色を以て從來にも現はれて居る。例へばスピノーザの「神の知的愛」の如きも其言説の上に表はれた面のみより見れば純粹なる没價值觀の上に立つて居るが、併し其神秘的體驗其者は寧ろ此汎價值觀の性質をより多く帯びたものであるやうに思はるゝ。フイヒテ及びシュライエルマッヘルの特徴は此宗教的體驗が超個人的理性の宇宙根柢化を出發點とする形而上學の上に置かれて居るとい

ふ點に存する。

フイヒテ (Anweisung zum seligen Leben) によれば、淨福ゲ・ツ・ム・グの生活に入り不可思議なる神の愛の泉に浴した者に對しては、一切の勞役と努力とは消失し、彼れの凡ての現象はその内面よりしてやさしくなだらかに流れ出で、而して何等の勞をも待たずして其れより離れ出でる。「外界の一切の事物に對しては、彼淨福の生活に入れる者は、其れを理解すると否とに拘らず、それが神の世界にあるといふこと、而して神の世界に於ては一物として善を目的とせざるものなきことを確實に知る。」即ちべきの世界とあるの世界とを對置して無限の精進を勸奨したフイヒテも後期に於ては宗教的體驗に於ける此兩界の一致を説いてべきを超越した生活に最高價值を置くに至つた。而して此神秘的體驗の世界觀は、吾々人間は絶對我の直接の顯現であり、感覺界は吾々の活動の舞臺としての其の間接の顯現、即ち吾々の意識を介して現はれたものであるといふ彼れの形而上學說を背景として居るのである。



シュライエル マッヘルも亦た殆んど同一のことを説いて居る。「あるところは一切は其れ(宗教)に對しては凡て必然である、而してあり能ふ凡てのものは其れに取ては無限者の眞實な缺くべからざる形像である。」敬虔なる心に對しては宗教は一切のものを神聖にして尊きものとする。此の如き言句は到るところに散見して居る。即ち一切のものを神的生命の流れ出でと見て之に不可思議の意義を認め小兒の如き受身の態度を以て全體に依憑するといふことを宗教の本體とし之に最高の價値を置く。而して此宗教觀も亦た理性の形而上學化とスピノーザ説とを結付けた觀念論的汎神論に基礎を置いて居るのである。

此の如き世界觀は之を學としての哲學として見れば少くともヘーゲル哲學に向けられたと同様の批評を受けなければならぬのであるが、併し最眞純なる宗教的體驗を其中に藏して居る。然らばそれは哲學より見て如何なる意味を有するものであらうか。第十七、八世紀の自然科学的没價

值的の世界觀は其自身哲學的世界觀たる權利は奪はれたが、併し哲學は之に一定の位置を與へた。即ちカントの批判哲學よりして同時に一定の權利と限界とを受領した。ロマンテック期の汎價値觀に對しても亦哲學は之に類似した態度を取ることには出来まいか。或は更に問題を廣くして、凡て此種の世界觀は價値の形而上學化を背景として居るのであるが、此價値の形而上學化といふことをば哲學は如何に見ねばならぬか。

## 一三三

ヘーゲル後前世紀の大約七十年代に至るまでの間は、歐洲は英佛獨の三國を通じて理想主義の勢力が衰えて自然科学的の世界觀がはびこつた時期であつて、即ち大體の傾向より言つて決定論的、機械觀的、没價値的、考へ方が大勢を支配して居つた。殊に獨逸に於て此思潮は最優勢であつて、一時はカント以後に於て斯の如きものが現はるゝといふことが怪まれ



るほど露骨な粗笨な唯物論さへ跋扈した。此の如き唯物論が學者間に跋扈したのは流石一時のことであつて長くは勢力を保たなかつたが併し一般民衆の間には長く恐るべき勢力を維持して、唯物論者の聖書と呼ばれたカール・フークトの「力と物質」は世紀末に至るまで、理想を否定する點に於て唯物論と同一であるショーペンハウエルの厭世哲學の書と共に最廣く通俗の間に讀まれた書物であつた。

斯の如く獨逸に於て特に沒價值的の考へ方が跋扈して理想主義の衰えたと對しては獨逸特有の事情が手傳つて居ると考へられて居る。即ち世紀初に於ける對ナポレオンの自由戰爭以後勃興して居つた國民精神は四十年代に於て獨逸統一の宿望が空に歸した爲めに一頓挫を來し、人心消沈して向上的努力の無効と理想的精進の無意義とが痛切に感せられた結果として、理想を無視して現實に安んずる唯物論や、現世を厭離して涅槃を説いたショーペンハウエル哲學が勢力を得るに至つたと見られて居る。

尙ほその外に、獨逸に於ては一時學界を風靡して居た、理想主義の最高發展たるヘーゲル哲學の發展若くは墜落として唯物論、歴史主義、懷疑說等を誘致したといふことも國民生活上の事情と互に因となり果となつたに相違ないと思はれる。併し英佛獨に共通な思潮の主因としては前世紀に於ける自然科学の状態を擧げねばならぬと思ふ。自然科学は前世紀の特産物ではなくして「ルネッサンス」に勃興の端を開いて居る。而してカント以前の哲學の決定論的機械觀的傾向は之に刺戟されて成立つて居るといふことは前に述べた通りである。然るに「ルッソー及び「ストゥルム・ウント・ドラング」の詩人の「感情」やカントの「理性」は外部よりして吾々を拘束する此「自然」の壓迫に對して反抗の聲を揚げ、次で「ロマンティック」の情熱と憧憬とが之に勢援して遂に「ロマンティック」期の理想主義哲學の黄金時代を産み出したのであるが、併し其哲學の内容と密接に結付いた先天的構成の方法が極端に經驗を輕視し且つ其結果が經驗科學の結果に矛盾するといふやうなことよりして、



此哲學は次第に自然科學者の反感と輕蔑とを招く様になつた。のみならず自然科學は第十七、八世紀に於て開拓が困難であると感せられて居つた新領地の開拓に徐々成效して來た。それは即ち生活現象である。第十七、八世紀に於ても生活現象の機械的説明の可能は唱へられた。デカルト、スピノーザ等は其代表者と見られ得る。併しそれは唯の想像説たるに止まつて確實なる實驗の上に立つて居らぬ。従つて機械觀に反對して有神觀や目的觀を説かんとする論者は常に此生活現象をば最後の牙城として居る。有機物の發現は機械的説明の限界であるとは此種の思想家の常套語であつて、現にニュートンの如き機械的物理学の大家がその信者であつたことは廣く知らるゝ事實である。斯の如くしてかの時計と時計師との關係より類推して生物の創造者たる神の存在を證明せんとする「時計師哲學」と呼び「活力論的目的論的證明」*vitalistisch-teleologischer Beweis* と呼ばるゝものが成立つて多數の信者を有つて居つた。然るに第十九世紀に入つて生活

現象の機械的説明は漸々精微の域に進み實驗の基礎の上に立つに至つた。比較解剖學や醫化學や、生理學やの研究はロベルト・マイエルの「エネルギー」不滅律の發見と相待つて「生活力」の概念を打破して普通の物理力によつて生物體従つて人體までも凡ての作用が説明され得るといふ信念を強くした。最後にラマルク、ダーキンの進化論が現はれた。是等の發見は第一に一般に機械的自然觀が徹底して成立し得るといふ信念を固ふすると共に、他方に於ては、其の或者は從來特に靈性を賦與されて居つた人類と他の動物との間の類差を否定することによつて、或者は人類の起原や進歩をば生存競争適者生存等の原理によつて説明することによつて、「ロマンテック」期に高潮に達して居た崇高なる價值感情を滅殺した。

大體斯の如き事情に基いて前世紀の中葉より七十年代に亘つて私の所謂自然必然的の考へ方に基いた現實主義、其最粗笨の形としては唯物論が旺盛を極めたのであつたが、六七十年代よりして萌し始めたカント哲學の



復興は一步一步理想主義的哲學の復興を促し來つて、前世紀末より現世紀に亘つて所謂新理想主義が種々の形を以て勃興するやうになつた。その中に最重要なるものとして私は此講演の題目となつて居る目的觀批判的の考へ方を代表する西南獨逸派の哲學を擧げる。

## 一四

此派は價值の研究を以て哲學の中心問題として、従つて其哲學の主要部をなすものは論理、倫理、美學等であるが、併し之が唯一の問題ではない、最後に價值と現實との統一又は結合を見出して此兩者を併せ含むところの世界の學(Weltlehre)即ち世界觀を立てんとする。併し此派に最重要な部分は價值學(Wertlehre)であつて、殊に其の最注意される様相は其方法である。

心理的方法是價值を吟味し決定することは出來ぬ。其故にカントは第一に認識論の方法として之を排して眞理の理想概念をきめて之より出發

して之に適つた表象結合を探求するといふことを務とする批判法を案出した。而して更に此方法をば其對象の性質に應じて多少づゝ適用の仕方を更へはしたが、善及び美の價值の批判、即ち倫理學及び美學の上にも適用した。次にフイヒテは、此方法によつてカントが發見した種々の理性の機能に統一と組織とを與へんが爲めにカントの暗示に基いて理性の最高目的をきめて之より出發して凡ての理性の機能を其れに必然的な手段として演繹するといふ目的觀的方法を案出した。併しそれは「ロマンテウク」の哲學に共通な純先天的方法辨證法の形を取つた爲めに多様の格段なる規範又は先天機能を導き出すことは出來なかつた。尙ほ又た、フイヒテに端を開きヘーゲルに至つて發展の頂點に對した超個人的理性の形而上學化、宇宙根柢化の上に立つ汎理的觀念論は其形而上學的豫想より出發して價值の體系を導出さんとしたが、併し第一に形而上學的豫想を以て出發したといふ點よりして嚴密なる學としての體裁を缺き、第二に價值の相對觀若くは



平等觀に陥り若くは之を誘致し、べきの意義を没却し、批判法の現はれざるを得なかつた根本精神に背くに至つた。哲學は多様の格段なる規範を導出さんが爲めにはどうしても經驗的材料に頼らざるを得ぬ。又た學といふ體裁を損せざらんが爲めには更に細愼の出發點を要する。

併し如何なる意味にて經驗的材料にたよるべきであるか。若し經驗的材料によつて規範を基礎づけんとするならばそれは言ふまでもなく心理的方法に逆戻りして敵の軍門に降ることを意味する。經驗的材料の資源は前世紀以來は其以前に比して非常に豊富となつた。カントの當時に於ては此資源は主として心理的内省、即ち自己の精神内に於て眞善美の三面に亘つて普遍妥當の要求を有する活動の省察に限られて居つたが、併し史的世紀と呼ばれた前世紀以來史的科學の勃興となつて、科學史、美術史、文藝史、道德史、哲學史等の研究は空前の盛況を呈し、吾々に人類の歴史に於て妥當とされた種々の價值や有價值對象、即ち價值と現實と結付いたもの、即ちリッ

ケルトが *Güter* と呼ぶものやを示す様になつた。併し材料の資源は如何に豊富となつても其材料の効力は原理上變化せぬ。即ち之に依て供給さるゝものは飽くまでも心理的若くは歴史的に妥當とされた者に過ぎぬのであつて、それが其自身に於て妥當なるものであるといふ保證は出て來ぬ。若し唯是等の資源のみにたよるとすれば、吾々は唯心理的又は歴史的に制約されたるものをば規範意識同様の絶對價值を有すると誤認し、唯個人若くは多數人類に對して妥當なるものをば其自身に普遍妥當的なものと混同する恐がある。此危険は實際論理學の場合にはそれ程大きくはないが、併し倫理學及び美學の場合には重大である。歴史的に規定された格段なる社會的又は個人的事情に原因を有する思想なり感情なりに誤つて絶對價值が與へられるといふことは屢起る事實であつて、生成法を辯護して批判法を非難すべき好材料となるのである。若し批判法を解して、單に種々の資源よりして事實上妥當とされて居るものを探し出し、而して唯其れに



直接の明證エビデンスを伴ふといふ一事によつて直ちに普遍妥當性を之に附與するにあると見るならば、此危険は眞實避けることは出来ぬ。其故に批判法が此危険を避け得んが爲めには、材料を取捨選擇する爲めに、或は價值と現實と結び付いた有價值對象から價值を引離さんが爲めに、更に組織的な標準を求めねばならぬ。而して吾々はフイヒテが初めて批判法と結付けた目的觀的方法の精神を取り之を改造して此要求に應ずることが出来る。即ち、何人も承認せねばならぬ根本目的を豫想し、此目的の實現の爲めに必然的に承認されねばならぬ制約をば是等の材料を機會として、求めるといふ方法を探ることによつて、規範の目的論體系を作ることが出来る。

尙ほ精しく言へば、論理上の公理や、道徳法や、美的規則やの妥當性は演繹的にも歸納的にも證明することは出来ぬ。何故かなれば、是等の公理や法則は最高な、一般的な、一切の演繹の基礎となるものであるから、其自身より高きより、一般的の者から演繹されることは出来ぬ。又た歸納的に導出さ

れたものは普遍妥當性を要求することは出来ぬ。是等の公理や法則や規則やが眞であるといふことは、唯吾々が思惟や意志や感情やの理想として豫想しなければならぬ目的に基く。即ち、若し吾々が普遍妥當的に承認されねばならぬ表象結合としての眞理を欲するならば吾々は或思惟原理の妥當性を承認しなければならぬ。若し吾々が正邪の絶對標準があると信するならば吾々は或道徳的規範の妥當性を承認しなければならぬ。若し美が唯の主觀的満足以上のものであるといふことを認むるならば吾々は美の普遍的規範を承認しなければならぬ。約めて言へば、知情意の三面に亘つて普遍的に承認されねばならぬ作用があるといふ根本豫想より出發して、其目的を實現せんが爲めに缺くべからざる制約として認めらるべき精神活動の種々の形式を探るのである。而して經驗的材料は此の如き形式を其中よりして選り出す爲めの機會を與へる。吾々は是等の材料中よりして今述べたやうな條件に適つたものを選り出す、若くは引離すの



である。斯くすれば吾々は現實に與へられたる格段なる心理的事實や史的事實をば論證根據としてではなく唯之を機會として規範や公理を見出すことが出來、而して斯くして初めて先天的に妥當なる公理や規範の認定は其自身經驗的に基礎づけられてはならぬといふ要求に應ずることが出来る。之によつて初めて、カントが自己の先天要素の認識は先天的でなければならぬといふ趣意が徹底し、フリース、ベネーケ等の心理學派が先天要素は吾々の認識作用中に存する與へられた事實であるから吾々は内省によつて經驗的に之を意識し得るのみである、カントの先天要素の認識は後天的でなければならぬ、といふ思想より出發して來る批判法に對する重大なる非難を斥けることが出来る。

斯くて、論理の體系は、普遍妥當的思考があるといふ根本豫想より出發して經驗的材料を機會として其缺くべからざる制約として目的觀的に發展さるべき根本原理の總體である。倫理學の規範は、普遍妥當的な意志及び

行動が可能ならんが爲めに、經驗の助を借りて目的觀的に導出される命令である。美的規則は、それを待つて初めて普遍妥當的な感情が可能となり得るところの制約として經驗の助を借りて導出されたものである。要するに、眞、善、美の規範は普遍妥當性といふ目的に對する必然的な手段として現はれて來る。

或はかういふ非難があるかも知れぬ。眞、善、美の三者に亘ての範疇は吾々の思考、意志、感情の理想として豫想さるゝ目的に制約されるのであるから、此方法にも豫想がある。「ロマンテマク」の哲學の形而上學的豫想を學的でないとして斥けた非難は頓て此方法にも向けられるではないかと。吾々は之に對して二つの事項を以て答へることが出来る。第一に、前にも少しく論及したやうに「ロマンテマク」の哲學の豫想は形而上學的豫想である、物がさうあるといふのである、従つて動きが取れぬ。之に反して此方法の豫想は純粹のならばである。之を採用せぬものに對しては必ずしも之を



強ひぬのである。之を認めぬものは此哲學に取つては無縁の衆生である。吾々は之と共に哲學の研究に進むことは出来ぬとして度外に置くのである。此處に此方法が「ロマンティック」の考へ方に比して細愼な點がある。のみならず、第二に此豫想は嚴密に言へば所詮ならば、を出でぬのであつて之を證明することは不可能であり直接の事實として之を示すことも其者の性質上不可能である(普遍は事實となり得ないから)が、併し普通の場合のならばとは性質を異にする。吾々の人文活動は凡て此信念に動かされて成立つて居る。豫想ではあるが吾々の思考、道德、趣味の生活に必然な豫想である。少くとも認識上に於ては吾々は此豫想を否定することは出来ぬ。無論相對論者なるものはある。併し相對論者は其相對論をば自己の一時の私見として説かずして之を主張し證明せんとして居る。即ち一時的な個人的な思考作用を超越した真理の存在を許して居るのである。相對論を主張し證明せんとする者は頓て之を否定するものである。

## 一五

西南獨逸派が理性價值を研究する爲めに取つた目的觀批判法の性質は一通り明かにすることを得たと思ふ。最後に此派は私の所謂自然必然的及び精神必然的の二つの考へ方、或は其結果たる沒價值的及び汎價值的の世界觀に對して如何なる態度を取るかを見て此論を結ばうと思ふ。

沒價值的機械的世界觀に對する此派の態度はカントの其れと同様である。即ち自然科学者の見た沒價值的機械的世界は、自然科学に固有なる先天原理に依て雑多の感覺の材料が淘汰、選擇、加工されて出来上つたものである。或は、與へられたる材料が理性の立法的活動に順應して成立つたものである。其先天原理は理性の主觀的機能に屬するものであるから、形而上學的には客觀的の意義は有つて居ないが、併し普遍妥當的であつて認識論上の意味に於ては客觀的である。従つて沒價值的、機械的世界觀は



主観を離れた客観の實在の模寫ではないが、併し超個人的機能の必然の所産であつて普遍妥當的の價値を有する。

斯くの如くして、自然科学者の見た世界が沒價値的で機械的であるといふことは其れに固有なる立場、其れに固有なる先天原理、即ち因果律及び實體永存律といふ様な根本豫想の必然の結果であるから、自然科学者は自然科学者としては飽くまでも其沒價値的な機械的な世界觀を徹底せしめねばならぬ。自然科学が其説明の原理として、目的とか、生活力とかいふやうなものに訴へるのは不徹底であり、墮落である。併ながら此の如き世界は實在の模寫でなくして雜多の感覺が先天原理に依て成形され加工された結果であるから、若し自然科学に固有なる先天原理以外に他の普遍妥當的な原理があるならば、又た別種の世界が成立し得る理である。従つて自然科学的の考へ方の上に沒價値的、機械的の世界觀が成立つたからと言つて、それが唯一の世界觀であるといふことは出來ぬ、其れは毫も絶對的に理想

や價値や目的やを否定する理由とはならぬ。カント前の沒價値的、機械觀的の形而上學は認識論上の客観をば形而上學的の客観と混同した結果に外ならぬ。斯くて自然科学的の考へ方と其結果たる沒價値的世界觀とは同時に一定の權利と一定の限界とが配與されるのである。

然らば私の所謂精神必然的の考へ方、及び其結果たる汎價値的世界觀は如何に見らるゝか。此點を考査するに當ては吾々は此世界觀を組立て、居るところの二つの契機をば分けて考へることが所論の明亮を期する上に必要である。第一は此世界觀の基礎となつて居るところの價値又は理想の形而上學化である。第二は之と結付いて居るところの淨福 (Glückseligkeit) の體驗である。一切の事物に必然の意義を認めるといふこと、若くば一切の現實を純善純淨と見るといふことは古來宗教的體驗の極致として屢説かれたとであるが、其れが哲學說の形を取つて居る場合には多く理想の形而上學化、宇宙根柢化と結付いて居る。價値の創造者としての超個人我



を形而上學化、宇宙根柢化して、其上に一切現實即理想を説き、不許不と價値の對立とを超越したる淨福の生活を説いたところの、前に述べたヘーゲル、フイヒテ(後期)、シュライエルマッヘル等の思想は即ち其適例である。吾々は此の如き世界觀に於て密接に結付いて居るところの此二つの契機を離して考査して行きたい。第一に理想の形而上學化といふことより着手する。

規範又は理想が超人間的、超驗的實在を有するとする信仰、言換ふれば、理性の規範は單に吾々自身の作爲ではない、永遠の大法であるといふ確信は、最確實なる、最眞純なる良心の體驗である。眞純なる良心の體驗には必ず其良心の命令が同時に永遠なる絶對的の大道であるといふ確信を伴ふて居る。經驗論者の中には、良心をば單に社會學的に説明して自然意識對良心の關係をば個人中に於ける純個人的作用と其れが含まれて居るところの社會に事實的に成立つて居るところの集合意識との關係に還元せんとするものがある。是等の論者によれば、經驗的に成立つて居る所の集合意

見に合致するものは眞である、之に反するものは偽である。經驗的に成立つて居るところの風習や慣例に合致するものは善である、之に背くものは惡である。傳習に契合して感ずるものは善き趣味を有するとせられ、之に反するものは美感を缺くと見らるゝ。吾々の個人精神は事實として成立つて居るところの一定の考へ方、意志又は行動の仕方、感じ方の中に養成せらるゝ。其結果として個人精神の内に個人的でない普遍的なものが成立つ、此普遍的なものが知、情意の三面に亘つての廣義の良心である(良心といふ語が廣義に解せられて單に道德に關してのみならず認識及び趣味の上にも適用され得、且つされねばならぬといふ理由は第一論文に詳述してある)。規範意識と自然意識との關係は個人精神内に於ける此事實的の集合意見と個人的性向や個人的經驗に基ける知情意の作用との關係に還元され得ると。蓋し普通良心と稱せられて居る事實の大部分は此方法に依て説明され得るは事實である。吾々個人は其れの屬する社會の多數に依て



承認されて居る知情意の三面に亘つての評價の仕方の裡に養成され、次第に習ひ性となつておのづから此評價の仕方を自己の評價の標準とし、之に依て個人的の性向や關心やを規正し行くやうになるといふは事實である。併し人文進歩の行程に於て新しき規範が如何にして次第に意識され、若くは已に意識されたる規範が如何にしてより有効に自然意識を支配する様になるかを吟味すれば、此説明法は不充分であるといふことが分る。從來意識されざる規範が次第に新たに意識されて規範意識の内容が漸次に豊富になり行き、又た已に意識されたる規範も次第により有効に自然意識を支配する様になり行くといふことは大體人文發展の歴史が示すところの事實であるが、此事實は如何にして起るかと言へば、或格段なる人格が事實として成立つて居るところの集合精神即ち普遍的な評價法から次第に解放され行くといふことに依て、言かふれば、或個人が其他の人が全く意識しないこと、或は時としては多數の人の意識したこと、は全然反對したこと

を新たに意識することに依て起るのである。個人精神が唯々事實上已に成立つて居ることの集合精神に支配され左右されて居るのみでは人文の進歩は不可能である。而して此場合に於て此個人は何に基いて此集合精神に對して自己を主張し固持せんとする勇氣を得來るか、時には強烈なる反對や迫害に對抗してまでも此新規範や規範の新適用やを提唱擁護せんとする其勇猛心は如何なる源泉より湧出するかといふに、己れ一己の性向とか、興味とか、好惡とか、或は一定の時間又は空間、一定の時期又は邦土に對する相對的價値を有するといふ様な思想よりしては斯の如き勇氣は湧起することは出來ぬ。常に事實上妥當して居るところの格率よりして之を超越するところのより高き原理に訴へることによつて、或は、時間的な、歴史的な、人爲的な、相對的なものを棄て、永遠な、神的な、絶對的なものに訴へるといふ意識よりして其勇氣と確信とは湧出するのである。無論此確信は常に必ずしも正確ではない。個人が永遠の價値を有すると信ずるものが常



に必ずしも眞に永遠でない。神的であると信ずるものが人爲的たるに止まるといふことはある。併し斯る永遠なるものに訴へるといふことが良心の眞純なる體驗に屬するといふこと、而して此體驗が人文進歩の源泉であるといふことは否定すべからざる事實である。斯くて吾々は、前に述べた社會現象としての良心即ち集合意識に依ての個人的行動の批判が社會的協同生活の實在に依て初めて可能なるが如く、絶對價值意識としての良心は人格の間に更により深き、超驗的な、形而上的な協同關係が成立つて居るといふことに依て初めて可能であるといふことを認めねばならぬ。斯くて良心の體驗は其の超驗的な、絶對的な據り處とし、規範意識の形而上的實在を豫想するのである。

宗教上に於ける神は即ち此形而上的實在に外ならぬ。普通の宗教意識に於ける神は最高價值の總體を其内容とするところの人格である、或はあらねばならぬことを凡て現實にし、あつてはならぬことは毫も含まぬと考

へられたる人格、簡單に言へば實在する規範意識である。吾々が自己をば此超越的實在に關係を有する、或は之に依て決定せられて居ると感ずることが宗教生活である。宗教上の「聖」*Das Heilige* は眞善美と並立した第四の別種の價值ではなくして、此超驗的、超越的實在に關係を有ち來つた範圍内に於ける是等の凡ての價值其者である。無論此神の表象や宗教的生活やには時代、民族、個人等の特殊な經驗に制約されたる特殊な、偶然的な、表象、感情、意志及行動の形式を伴隨して、具體的、成立的、歴史的の種々の宗教を現出して居るのであつて、此等の特殊な表象、感情、意志及行動の形式は經驗に制約されて居るから轉變的であり永遠の價值は有つて居ないが、併し形而上的實在に對する關係、其者は理性生活或は價值生活に必然的である。

斯くて理想又は規範の形而上學化といふことは良心又は理性生活に必然の事項であるが、然らば此實在化されたる理想を宇宙根柢と見て一切をばその顯現又は發展の形式若くは段階と見、一切現實即理想と見るとい



ふ思想は如何といふに、其れは其儘の形を以ては承認することは出来ぬ。絶對實在及び絶對原因と絶對人格の規範意識とを同視するといふことには、現實の規範たるべきものが一切の現實であり若くば之を産み出す、従つて反規範的のものまでが其れの現象又は所産であるといふ不可解の結論を伴ふ。古來神を宇宙根柢と見る結果として、現實中に於ける反價値の現象の存在に對して神を辯護するところの種々の教説、即ち所謂辯神論の名の下に總括され得べき種々の教説が現はれて居るが、併し何れも不成功に了つて居る。宗教的意識其者がやがて世界殊に人性に於ける罪惡や不完全の意識を以て其核心として居る。宗教的意識に取ては此罪惡及不完全といふ事實は一切の中最確實な事實であつて、其れがやがて吾々が解脱或は救濟を希求する凡ての情熱の淵源となつて居るのである。價値の世界と現實の世界、不許不の領域と不可不の領域は全然無縁のものではない。不許不の法則と不可不の法則とは全然不一致なものであるとは出来ぬ。併し

又全然一致することは出来ぬ(第一論文參照)。其故に若し神をば一切萬有の根柢又は淵源と見るならば、如何にして萬有に此の如き有價値なものと反價値なものとの對立があるかといふことは到底説明することは出来ぬ。其故に古代哲學は多く神に對して物質又は「非有」形式に對して資料を想定するといふところに止まつて居る。後に至つて神の本質よりして神に反するものを導出さんとする思想(ヤコーブ・ボームは其適例である、第一論文參照)が出て來たが、併しそれは比喩的説明たるに止まつて學とは言へない。價値の形而上學化は理性の體驗に必然のことであり、而して一元論は吾々の世界考察の根本的豫想である。而かも現實に於ける有價値と反價値との二元觀は一切の事實中の最確實なる事實である。此兩者の矛盾は吾々は到底超越することは出来ぬ。辨證法は之を超越せんとして出でた最學的なものであるけれども、併しそれは正より反が出で、更に兩者が即せられて合となるといふ過程をば、記述するのみであつて、理解し説明し得るもの



ではない。斯くて此最後の疑問は其本性上吾々の認識に對しては到底不可解なものとして残る。吾々の認識の圏域を超越したる秘密である。

然らば古來屢宗教的狀態の極致とされて居る、現實と理想とを相即することに依て、或は如實の世界をば其儘あるべき様になつて居ると見ること、に依て成立つところの淨福の状態には吾々は絶對的に棄權せねばならぬか。曰く、批判哲學の立場より言へば、前に述べたやうに、現實に於ける有價値のものと反價値のものとの對立は終極の事實であつて、到底否定することは出来ぬ。併し批判哲學は吾々に、理性又は良心の體驗に於て自由の天地を開拓し淨福の生活を享樂し得る可能の餘地を與へる、否、單に餘地を與へるのみならず之に確實なる基礎を與へる。吾々は理性或は良心の力に依て自由の天地をば自然の世界の内に開拓することに依て淨福と永遠とを體驗することが出来る。批判哲學の立場より言へば眞誠の自由は知情意の作用が澁滯なく普遍妥當的な規範に支配さるゝ時に實現される。

思考は、其れが他の動機に支配されずして純粹の論理的規範のみに支配さるゝ時に自由である。行爲及び意志は、其れが他の動機に支配されずして倫理的規範のみに支配さるゝ時に自由である。製作及び觀賞は、其れが他の動機に支配されずして美的規範のみに支配さるゝ時に自由である。自由とは廣義に於ける「良心の支配」(Herrschaft des Gewissens)「規範意識に依ての經驗意識の決定」(Bestimmung des empirischen Bewusstseins durch das Normbewusstsein)に外ならぬ。而して此自由の生活は同時に永遠の生活である。規範は永遠に妥當するものである。希臘以來の哲學に依て求められた「眞在」(ontos)「時空轉變を超越したる眞の意味に於ての物其自は此規範に外ならぬ。吾々は自己の精神活動を此永遠者に契合せしめることに依て自ら永遠の生活に入る。轉變生滅の吾々の生活の裡に、恒常なるもの、永遠なるものが良心又は價値意識といふ形を以て現はれ来る。之に依て吾々の生活は、生滅無常なるもの、繫縛を脱し、小なる我を忘れて、永遠者と合致する。



吾々は之に依て自由の世界に遊び、淨福の生活を享樂し、更生を體驗する。斯くて廣義に於ける良心生活は自由の生活、永遠の生活、淨福の生活である。「ロマンティック」期の理想論的形而上學說或は佛教の華嚴の教も同様であると思ふに依れば、一切現實は「理念」「理性」「ロゴス」、或は神の顯現又は發展として其儘純眞、純善、純淨である、吾々は心眼の曇を去つて之を見るとここに依て全然不許不を離脱したる淨福の生活を享樂し、又は自由無碍の天地に遊ぶとこが出来来る。批判哲學の立場より言へば、淨福の生活は不許不が滯なく現實を支配することに依て成立する。其自身に於て純眞、純善、純淨なる世界を認識することに依て成立せずして、理性の立法的活動に依て與へられたる材料を澁滯なく征服して眞善美の世界を開拓し行くことに依て成立する。

序文にも述べてある様に此最後の一節は原論文に提起されてありながら答へられて居ない疑問、即ち理想の形而上學化を基礎とした汎價值觀に對して

西南獨乙派は如何なる態度を取るかといふ問に答へて此論文を完結した形とせんが爲めに新たに追加したものである。但し哲學雜誌上原論文の結末にも追述して置いたやうに此點に就てギンデルバントとリッケルトとの間には多立思想の相違がある。此異同を精述することは此論の一般目的に對しては餘り特殊のとなり、尙ほ他の種々の背景を要するから今はギンデルバントの「プレルードイエン」及び「哲學概論」に依て大體のことを紹介するに止める。

## 自然必然的精神必然的及**目的觀批判的終**

自然必然的、精神必然的、及び目的觀批判的



大正五年一月一日印刷  
大正五年一月五日發行

定價金壹圓貳拾錢

不許

近世に於ける  
「我」の自覺史

複製

著作者 朝永三十郎

發行者 大葉久吉

東京市日本橋區本石町三丁目拾七番地

印刷者 渡邊八太郎

東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社

發行所

東京市日本橋區本石町三丁目  
振替口座東京二八〇番

東京寶文館

關西專賣

大阪市東區淡路町四丁目  
振替口座大阪四三番

大阪寶文館



京都帝國大學  
文科大學教授

文學博士 朝永三十郎著

# 哲學綱要

布製 全一冊 定價金壹圓貳拾錢  
送料金拾貳錢

●本書は初學者をして哲學上の諸問題の一般の概念と、其の歴史的發展の概觀とを得せしめ、此等の問題を解決するに當つて、晩近の哲學者の採用したる研究法の一斑を窺はしめ、以て自ら進んで、其の解決を試みんとするの興味を起し、又精細なる哲學史の研究に進むべき素地を作らしめんとして編著せられたるものなり。

●本書の根本思想と行論の順序とは、大體柏林大學教授バウルゼン氏の *Einführung in die Philosophie* に依り又大體の結構はバウルゼン教授の著に據りしと雖も、其の他キェルペ、エルザレム、ロージャース等諸家の哲學概論を參酌せし處少からず、而して實例及び歴史的敘述の部分にありては、著者自身の見解を加へたる處多く、其の他全巻を通じて、可及的初學者に理解し易き様取捨改竄を加へられたるものなり。

●本書の文體は専ら平易にして達意的なるを旨とし、難解の語句と思はるゝものは、括弧を設けて一通り其の意義を説明せらる。加之各節の初めには細字を以て其の節所論の摘要を示しあれば、初學之士は是を指導として、本文の意義を解するの便あり。

京都帝國大學  
文科大學教授 文學博士 朝永三十郎著

# 增訂哲學辭典

上製背皮 全一冊 定價金貳圓參拾錢  
送料金拾貳錢

●語類及原語 本書は純正哲學・宗教・心理・倫理の術語は勿論、斯學に緊密の關係を有する生理・物理・精神病學等の語に至る迄廣く網羅して簡明平易に説明を加へたり。又各術語には必ず獨・英・佛の原語を對附し、必要の場合には、希臘・羅典・希伯來等の原語をも加へたり。●索引の至便 卷末に邦語の術語及人名の索引を附加せる外獨・英・佛・希・羅等諸國語の索引を各別に設けられたり。故に和洋孰れの著書に就ても直に檢索するを得るの至便を有せり。

東京帝國大學  
文學士 今福 忍著

# 增訂最新論理學要義

布製 全一冊 定價金壹圓八拾錢  
送料金拾貳錢

●本書の内容 本書は著者專攻の斯學につき、最新の學理に基づき其の要義を敘述せられたるものにして、世に論理學の書多しと雖も此の書の如き要領其の宜しきを得たるものはこれ無し。宜なるかな。發刊以來需要甚だ盛にして、改版數次に上り好評嘖々たり。●附録 概念の意義・構成及び發達について、臆説の種類及沿革並に東西兩洋論理學變遷史の概觀なる一篇を添ふ。是亦研究者の好參考なり。



文學博士 福來友吉著

### 心理學審義

●本書は斯學の泰斗福來博士が數年の星霜を費して、新に著作せられたる千六百餘頁の一大名著にして、邦文叙述心理學書中の白眉たり、又巨擘たるものなり。

●本書は生命を以て一切の精神活動及び生理活動の根本原理と解釋し、以てオイケン及びベルグソンの生命哲學と相呼應し、從來の心理學と異り、生命實現論の見地より意識存在の理由を説明し、又人生の歸趣を闡明する等博士の創見に基づく最新心理學なれば、斯學研究者好個の寶典なり。

東京高等師範學校教授 文學士 吉田靜致著

### 倫理學演義

●本書は著者が該博にして確實なる知識と、最新にして卓絶せる見識とを以て、倫理學の巨細を懇切に叙説せられたる千三百餘頁の一大名著なり。

●著者曩に「倫理學要義」を公にして好評甚、今や又本書を著して斯學の蘊奧を闡明し、以て學界に貢獻する所あらんとす。中等學校教官、文檢受験者並に一般斯學研究者の參考書として無二の良書たるべし。

上製背華 定價金參圓八拾錢

全一冊 送料金拾六錢

上製背華 定價金四圓八拾錢

全一冊 送料金拾六錢

逓信省技師 工學博士 鳥瀉右一著

### 鳥瀉無線電信電話

我が國斯界の權威たる鳥瀉工學博士の本著は、我國に於ける邦文無線電信電話の最良書にして、近來稀有の名著たり。左の三編に分ちて無線電信電話に關する巨細を詳叙して餘蘊なし。

●第一編 小學・師範・中學等の教官諸彦の參考となるべき一般的事項につきて通俗的に叙述せり。

●第二編 著者が九州大學に於て講述せられたる講義を敷衍して更に一步を進めて詳細に叙述せり。

●第三編 實地に無線電信通信手たる者又は通信手たらんとする者に必要なる各種の事項を縷述せり。

布裝背草 定價金參圓

全壹冊 送料金拾六錢

廣島高等師範學校校長 文學博士 幣原坦著

### 滿洲觀

佛國は殖民地あり、而かも殖民なく、獨逸は殖民あり、而かも殖民地なし。而して英國は此の兩者を併有すと稱せらる。日本は果して如何の國民將來の發展を思ふ者、先づ慮るべき一大問題なり。今や日支新協約に滿蒙の天地は開かれたり。國民の活動は此の開放を有する實験を有し、世界の殖民地經營より觀て、我が滿洲の教育に甚大の趣味を寄せ、又劃切なる又世に新たなる殖民教育學建設の前提たらむとするもの、敢へて江湖にすゝむ。

布裝 定價金壹圓貳拾錢

全一冊 送料金拾貳錢



東京高等師範學校教授 理學博士 龜高德平著

# 化學と人生

化學が人生と密接なる關係ある學問なることは多言を要せざるなり。歐洲戰亂勃發以來化學工業を振興し、化學製品自給の途を拓くの急務なるを悟り、更に一層斯學研究の必要を自覺するに至れり。本書は博士が化學と人生との關係を闡明せんが爲に新著せられたるものにして、人生に關係ある化學的題目九十餘につきて、平易に趣味ある筆を以て詳細に叙述せられたるものなり。誠に近來の名著たり。

神戸高等商業學校教授 中川 靜著

# 信書清鑑

●本書は現代信書研究界の耆宿として定評ある中川教授が、多年苦心の結果公にせられたるものにして、既刊書翰文書中の白眉たり。幸に御清覽を給へ。  
■上卷 各種信書に通有せる信書の組織並に各局部的、新舊様式、語句用法、慣用語彙、立案手續、整理法、電報に關して通論的に解説して餘蘊なし。  
■下卷 季節、問候、通告、人事、金品、要請、會同の七門を經とし、親交、社交、商務、公務の四性を緯とし、更に之を三十九種に分ち、種毎に作成要項、誌料、例文、練習等の各項を設け、各論的に解説井然たり。

布裝上製 定價金 全一冊 送料金 (近刊)

布裝上製 定價金壹圓八拾錢 全一冊 送料金拾貳錢

東京高等師範學校訓導 馬淵冷佑著

# 外教訓物語

物語は先づ童話に始まりて實際的に及び、更に進んで歴史的に終るを自然の順序となす。されば本書天の卷には所謂童話寓話の類を蒐集し、地之卷には實際的の話を收め、人之卷には歴史的の話を收む。而して其話材は汎く内外に亘り古今に通じ、名話といふ名話は殆ど卷中に收めて餘蘊なし。勇壯なるあり、悲哀なるあり、滑稽なるあり、眞面目なるあり。趣味津津たる中に巧に教訓の意をほめかしたるは著者の最も苦心せられたる所なり。

天地の各人の一冊 定價各金壹圓八拾錢 送料各金拾貳錢

千葉縣高等女學校校長 高野松次郎著

# 學校食卓談話

本書は著者が多年の苦心を積み著せられたる書にして、學校及び家庭に於て兒童・子女に對し、談話すべき場合の材料を集録せるものにして、四月より翌年の三月に至る十二ヶ月に區分し、其の季節に適切なる各種の話材を排列す。而して話種には教訓的のものあり、擴智的のものあり、將た娛樂的のものありて、趣味津津たる裡に兒童・子女を教化する上に多大の効果あるべし。敢へてすゝむ。

布裝 定價金壹圓五拾錢 全一冊 送料金拾貳錢

(文部省通俗圖書認定)



理學博士 齋田功太郎 學習院教授 佐藤禮介共著

### 參 考 植 物 學 講 義

上製春革 定價金貳圓五拾錢  
全一冊 送料金拾貳錢

●本書は専ら中學校教授要目に準據し、普通植物學の要項を網羅し、之に詳細なる説明を加へ、又之が實驗の方法を詳説し、一讀植物學全般に亘る學理及び應用を容易に會得せしむ。卷中約四百の繪畫を挿入し、且附録には植物名學術語・和文對照表の索引を附し搜索に便せり。中學校教師諸士、文檢受験並に一般斯學攻究者に一讀を奨む。

兵庫縣御影師範學校教諭 山鳥吉五郎著

### 參 考 動 物 學 講 義

上 製 定價金壹圓八拾錢  
全一冊 送料金拾貳錢

●本書は動物學に造詣深き著者が既往數年間の苦心に因りて公にせられたる良參考書なり。叙述詳細、挿畫數百、而して目次・索引等親切に作成せられて、一閱明確を期せり。●小學校に備付して理科及び國語教授等の參考書として有益なるは勿論、中等學校教員諸氏及び斯學研究者の參考書としても適當なる好著なり。

蘆洲 池田四郎次郎著

### 故 事 熟 語 大 辭 典

布裝背革 定價金 六 圓  
全一冊 送料金貳拾錢

●本書は斯學の大家池田蘆洲先生の著にして、故事に關する諸辭典中の白眉たり。其の內容の豊富にして且整備せること他に比すべきなし。實に本書は幾萬冊に代る千載不朽の寶典ともいふべきものなり。●本書は著者十年間の苦心に成れるもの、語數實に三萬五千餘、支那文學關係方面の各部に涉り、五十餘種を收む。解説詳細、出典正確、挿畫斬新、索引の如きは至便なる三種の方法になるものを添ふ。

東京實文館編輯所編

### 增 訂 法 制 經 濟 大 資 料

布 裝 定價金參圓五拾錢  
全一冊 送料金拾 六 錢

●本書は大正四年の改版に係り、其の法制は現行法と一致せり。説明平易、叙述詳密、實例豊富にして、誠に學者・教育家の一大參考資料たるの價値を有す。されば發行以來好評を博し、改版既に數次に達せり。●東京朝日は評して曰く、法制經濟を網羅し、説明平易、解釋明快なり。學説は穩健にして一般的なるを採り、卷末には必要なる諸種の法令を附加せりと。此の公評又本書の一斑を窺ふに足るべし。



### 伯爵大隈重信著

#### 改訂國民讀本

和裝 文部省檢定濟  
全一冊 定價金四拾五錢  
送料金八錢

●大隈伯爵に「國民讀本」を著すや、滿天下の歡迎を受け、帝國民の智徳是によりて向上し、憲政の思想之によりて一大進歩を來せり。實に本書は國民の經典として至嚴至大の權威を有したりき。  
●然るに伯は時勢の推移に應じ之に改訂を施し、繁を削り要を加へ、舊本と全く其の面目を異にせる「改訂國民讀本」を公にせらる。これ時代の進運に伴へる結果にして大正國民の要求に基づける反響なり。

#### 國民小讀本

和裝 文部省檢定濟  
全一冊 定價金參拾五錢  
送料金八錢

●前記の「改訂國民讀本」は世上一般の認めて新時代の國民經典となすものなり。然るに其の文章の莊重にして所説稍高尚なるため、少年者流之が解明に困苦する者少なからず。  
●伯爵乃ち本書を公にせらる。されば其の程度は尋常小學終了期に相當せしめ、義務教育修了者が容易に國體・歴史・憲法・法律其他諸般の制度及び國民たるもの、精神行爲と理想とを解し得らるゝやう説述せり。

東京高等師範學校教授 文學士 吉田 靜 致著

●倫理學演義 全一冊 定價金參圓八拾錢 送料金拾六錢

東京高等師範學校教授 文學士 吉田 靜 致著

●倫理學要義 全一冊 定價金貳圓 送料金拾貳錢

文學博士 福來 友 吉著

●心理學審義 全一冊 定價金四圓八拾錢 送料金拾六錢

文學博士 福來 友 吉著

●心理學講義 全一冊 定價金貳圓八拾錢 送料金拾六錢

故文學博士 元良 勇次郎著

●心理學概論 全一冊 定價金參圓八拾錢 送料金拾六錢

東京帝國大學講師 文學士 今 福 忍著

●增訂最新論理學要義 全一冊 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢



東京實文館發行書目

●**增訂哲學綱要**  
 京都帝國大學文學博士 朝永三十郎著  
 全一冊 定價金壹圓貳拾錢  
 送料金拾貳錢

●**近世に於ける「我」の自覺史**  
 京都帝國大學文學博士 朝永三十郎著  
 全一冊 定價金壹圓貳拾錢  
 送料金拾貳錢

●**植物學講義**  
 東京高等師範學校教授 齋田功太郎著  
 全一冊 定價金貳圓五拾錢  
 送料金拾貳錢

●**植物學講義**  
 東京帝國大學教授 白井光太郎著  
 全一冊 定價金壹圓五拾錢  
 送料金拾貳錢

●**動物學講義**  
 兵庫縣師範學校教授 山鳥吉五郎著  
 全一冊 定價金壹圓八拾錢  
 送料金拾貳錢

●**生物學概論**  
 陸軍教授 安東伊三次郎 安藤秋三郎 共著  
 全一冊 定價金壹圓五拾錢  
 送料金拾貳錢

東京實文館發行書目

●**最近物理學講義**  
 理學士 森 總之助著  
 全一冊 定價金壹圓八拾錢  
 送料金拾貳錢

●**物理化學要論**  
 理學士 阿部隆次著  
 全一冊 定價金壹圓  
 送料金八錢

●**參考近世化學講義**  
 廣島高等師範學校教授 長 俊一同 大島鎮治 著  
 全一冊 定價金四圓五拾錢  
 送料金拾六錢

●**近世無機化學原論**  
 米澤高等商業學校教授 櫻井寅之助 米子中學校長 原田長松 著  
 全一冊 定價金五圓  
 送料金拾六錢

●**化學と人生**  
 東京高等師範學校教授 龜高德平著  
 全一冊 定價金壹圓八拾錢  
 送料金拾貳錢

●**鳥瀉無線電信電話**  
 通信省技師 工學博士 鳥瀉 右一著  
 全一冊 定價金參圓  
 送料金拾六錢



東京實文館發行書目

北村政次郎 津守英五郎共著

●通俗無線電信無線電話 全一冊裝 定價金四拾五錢 送料金六錢

文學博士 星野恒閱 文學士 青木武助著

●修正參增補考 日本大歷史 全一冊裝 定價金參圓 送料金拾六錢

文學士 阪本健一著

●參考 西洋大歷史 全一冊裝 定價金貳圓參拾錢 送料金拾六錢

東京高等師範學校教授 文學士 高木敏雄著

●日本建國神話 全一冊裝 定價金七拾五錢 送料金八錢

東京帝國大學文學士 藤田明著

●征西將軍宮 全一冊裝 定價金參圓 送料金拾貳錢

神戶高等商業學校教授 中川靜著

●信書精鑒 全一冊裝 定價金 (近刊) 送料金

熊本縣師範學校附屬小學校主事 大元茂一郎著

●小學材料編入 法制經濟綱要 全一冊裝 定價金七拾五錢 送料金八錢

東京音樂學校校長 湯原元一著

●生活及社會觀 全一冊裝 定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

大阪府天王寺師範學校校長 村田宇一郎著

●自治民育十二講 全一冊裝 定價金壹圓參拾圓 送料金拾貳錢

大阪府天王寺師範學校校長 村田宇一郎著

●學校中心 自治民育要義 全一冊裝 定價金壹圓六拾錢 送料金拾貳錢

文學士 陸軍教授 吉田靜致共著

●興國安民法の研究 全一冊裝 定價金貳圓 送料金拾六錢

●家族制度の將來 全一冊裝 定價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

東京實文館發行書目



東京實文館發行書目

東京女子高等師範學校教授 宮川壽美子著  
●女房說  
●法鐵砲三二ほう主義 全上 一冊製 定價金八拾錢 送料金八拾錢

廣島高等師範學校長文學博士幣原坦著  
●滿洲 觀 全上 一冊製 定價金壹圓貳拾錢 送料金拾貳錢

文學博士 幸田露伴校訂  
●世界小 觀 全上 一冊製 定價金拾貳圓 送料金拾六錢

奈良女子高等師範學校教授 錦織竹香著  
●珍南總里見八犬傳 全上 八冊製 定價各金六拾錢 送料各金六拾錢

近古以來 服裝沿革略 全和 一冊製 定價金五拾錢 送料金六拾錢

山田孝雄著  
●定校 平家物語 全上 一冊製 定價金壹圓貳拾錢 送料金拾貳錢

東京高等師範學校訓導 馬淵冷佑著  
●內外 教訓物語 全上 三冊製 定價各壹圓八拾錢 送料各金拾貳錢

千葉縣立高等女學校校長 高野松次郎著  
●新イソップ物語 全上 一冊製 定價金壹圓貳拾錢 送料金八拾錢

東京實文館編輯所編  
●學校食卓談話 全上 一冊製 定價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

愛知縣女子師範學校附屬小學校主事 平松折次編  
●小學校に於ける學藝會及資料 全上 一冊製 定價金壹圓五拾錢 送料金拾貳錢

尋常科教科書 人名地名索引 全洋 一冊製 定價金拾五錢 送料金貳錢

東京帝國大學內 史學會調查  
●外國地名人名一覽 全上 一冊製 定價金拾錢 送料金貳錢

東京實文館發行書目

東京實文館發行書目



東京實文館發行書目

蘆洲池田四郎次郎著

●故事熟語大辭典

全上 一冊 定價金 六圓 送料金 貳拾四錢

文學博士三島毅監修 蘆洲池田四郎次郎著

●增補故事熟語辭典

全上 一冊 定價金 貳圓 送料金 貳拾錢

京都帝國大學文學博士 朝永三十郎著

●增訂哲學辭典

全上 一冊 定價金 貳圓參拾錢 送料金 拾貳錢

法學博士 粟津清亮監修

●法律經濟新辭典

全上 一冊 定價金 壹圓五拾錢 送料金 拾貳錢

高野辰之和田信二郎共著

●字音假名遣辭典

全上 一冊 定價金 八拾錢 送料金 八錢

寶文館編輯所編纂

●新式國語假名遣便覽

全上 一冊 定價金 八錢 送料金 貳錢



356  
153



終

